ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第90号

池上遺跡の方形周溝墓の景観復原 ---------- 中川　和哉 -- 1
鰭付円筒埴輪の形式分類とその変遷 ---------- 筒井　崇史 -- 7
平成15年度発掘調査略報 ---------- 19
4．野条遺跡第8次
5．池上遺跡第16次・野条遺跡第9次
6．芝山遺跡
府内遺跡紹介　97．畑ノ前遺跡 ---------- 23
長岡京跡調査だより・87 ---------- 25
「第20回小さな展覧会」について ---------- 27
センターの動向 ---------- 29
受贈図書一覧 ---------- 31

2003年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

池上（いけがみ）遺跡の方形周溝墓の景観復原

中川　和哉

はじめに

池上遺跡は、京都府船井郡八木町大字池上に所在する旧石器時代から中世に至る複合遺跡である。この遺跡は、平成８年度の八木町教育委員会の分布調査によって発見された遺跡で、平成15年度までに17回の発掘調査が実施されてきた。

池上遺跡は、京都市の所在する京都盆地に隣接する亀岡盆地の北端に立地する。この盆地内には、下流で淀川になり大阪湾に注ぐ桂川が、北西から南東に貫いて流れる。

池上遺跡の中で注目される遺構・遺物は、古墳時代の独立棟持柱建物跡、100基以上の竪穴式住居跡、奈良時代の大型掘立柱建物跡、井戸、平安時代の条里地割関連溝などがある。

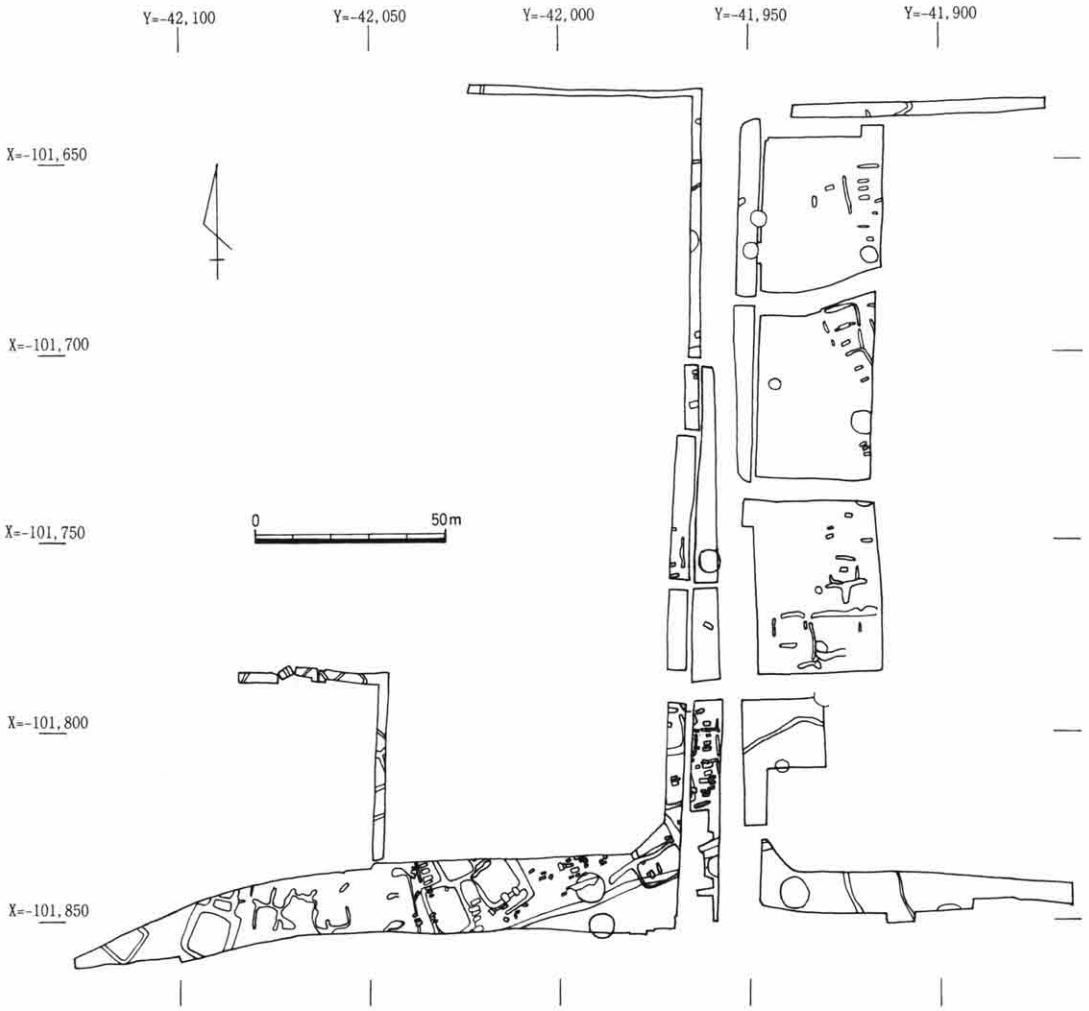
１．弥生時代遺構の概要

弥生時代は、池上遺跡で最も遺構が検出された時期の１つで、竪穴式住居跡、集落を区画する溝（ＳＤ01）、方形周溝墓とその埋葬遺構（木棺直葬が主体）が検出されている。遺構は、集落を区画する溝が掘られた後、それを埋めて竪穴式住居跡が営まれていることから、集落の拡張が認められる。その集落域が墓域となり弥生時代の遺構は新たに見られなくなる。遺構出土の土器（第２図）から見ると、池上遺跡のこれまで調査地点では、弥生時代中期中様～後葉までの遺構群が主体となっていると考えられる。第15次調査では、弥生時代後期の遺構が検出されているが、これまでのところ、分布は遺跡の西部に限られている。

第５次調査（中川ほか2000）では、弥生土器製作用の粘土と考えられる白色土が、竪穴式住居跡床面や住居内の土坑から出土している。出土した遺物には弥生土器のほか、石器や緑色凝灰岩製の玉作り関連遺物が多く含まれている。また、磨製石器の原材料である粘板岩は、石庖丁・磨製石剣などの完成品や未成品が多く出土している。

方形周溝墓は、第４次（谷口2000）・第５次・第11次（田代2002）・第12次（中川2003ａ）・第13次・第15次（中川2003ｂ）・第17次調査で検出されている。いずれも弥生時代中期のもので、60基以上発見され、主体部も120か所程度発見されている。第４次調査の埋葬主体部ＳＸＢ05からは、磨製石剣の鋒が出土している。副葬品と考えられる脚付きの小形の鉢が墓壙内から出土している。第12次調査のＳＫ547、第13次調査のＳＫ252でも、石鏃が棺内から出土している。これらは、いわゆる“戦死墓”に分類されるものである。

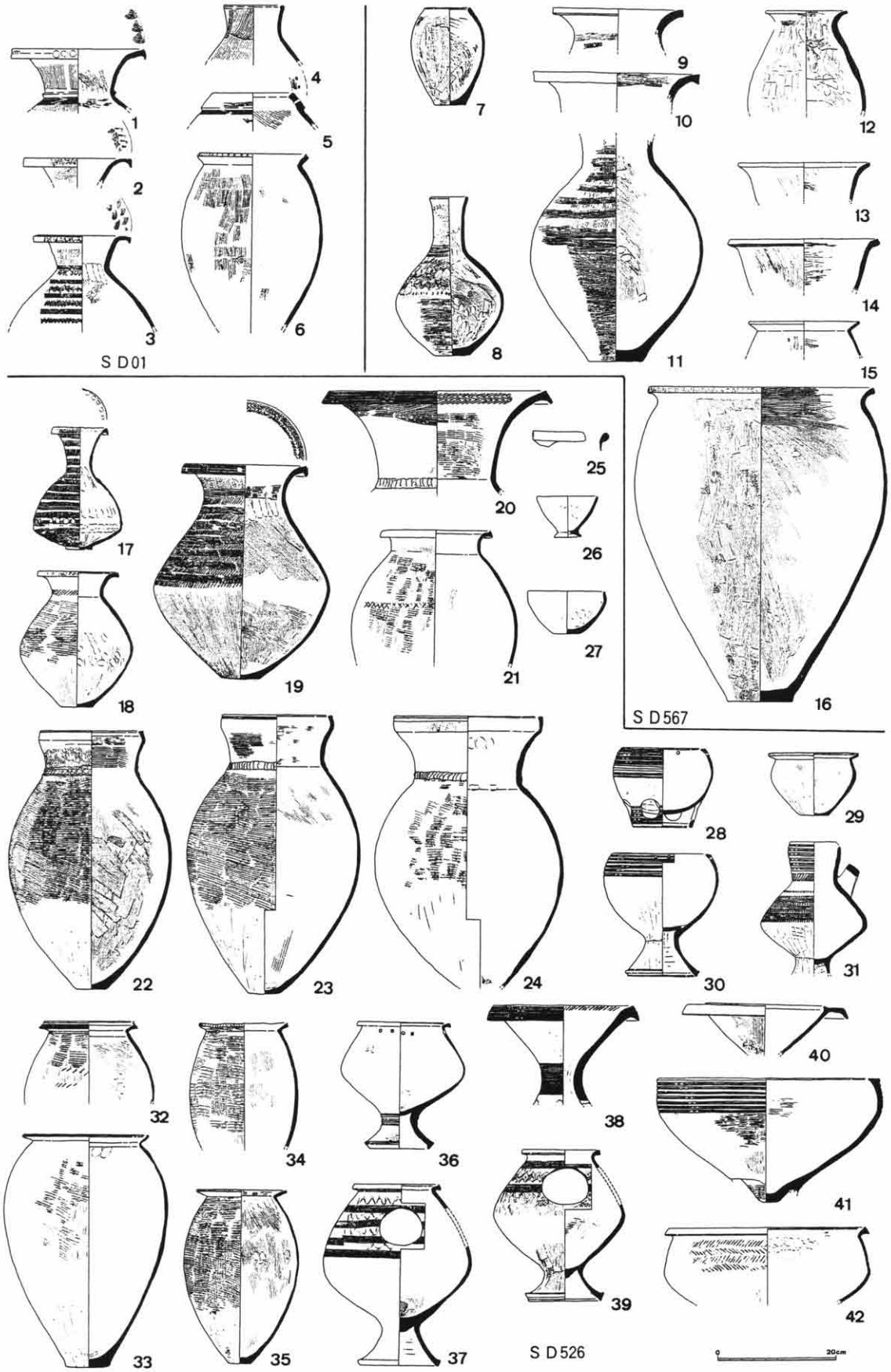
２．方形周溝墓の構造



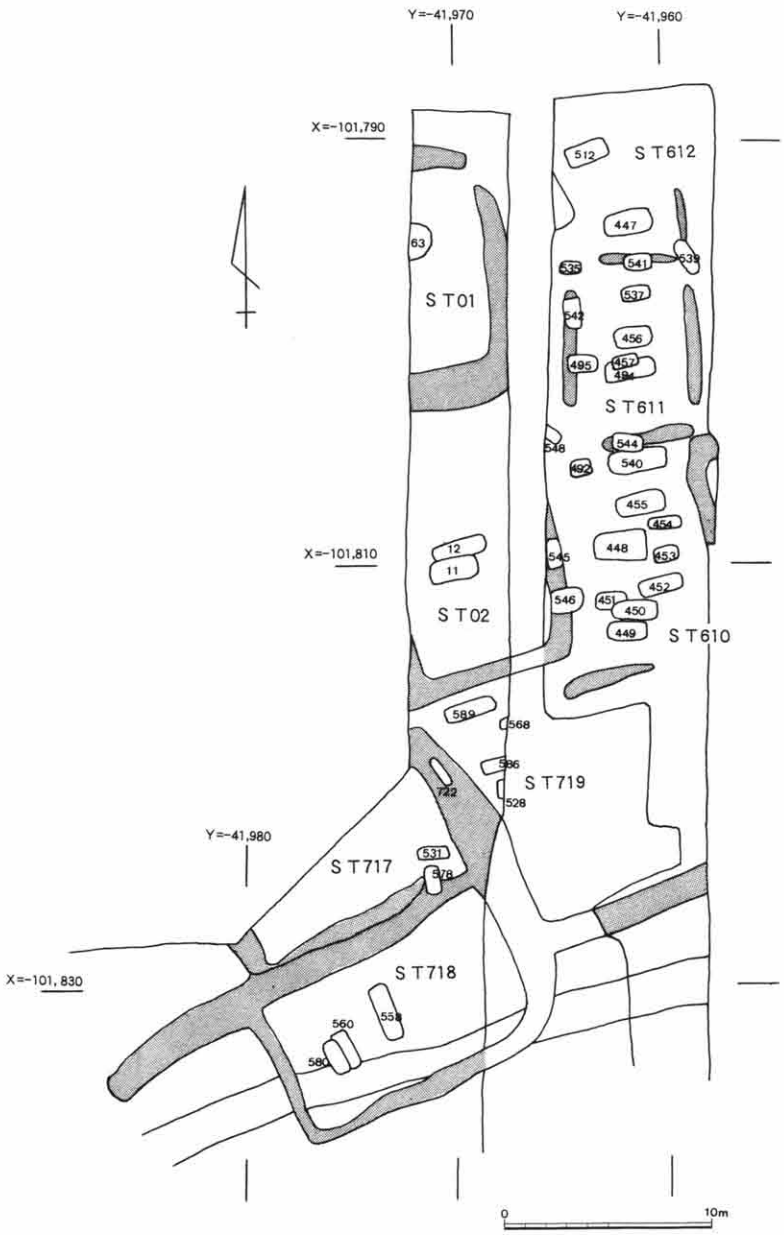
第１図　池上遺跡検出の主要弥生時代遺構

方形周溝墓の埋葬主体部の切り合い関係と主体部の深さから、現在削平されている周溝墓の上部構造を類推してみたい。第１図は、第５次調査第７トレンチ・第11次調査・第12次調査の遺構を合成した平面図である。第７トレンチで検出できたＳＴ610では、13基の埋葬主体部が検出されている。西側と東側の溝は、隣接する方形周溝墓をめぐっている周溝を共有したものである。埋葬主体部を作る上で、一番良い場所と考えられる墳丘上中央部には、大形のＳＫ448があり、その主体部とほかの多くの主体部は、主軸方向を合わせて穿たれている。ＳＫ451は、墓壙の規模が墳丘上の墓壙では小さな規模であるが、ＳＫ448と深さを同じくする。両方の墓壙は西辺を合わせて掘られている。墓壙の深さで分類すると、ＳＫ448・451に次いでＳＴ610の中軸上にのる墓壙(ＳＫ449・450・452・455)が深く、中軸から外れる土壙(453・454・492)は浅い。ＳＫ451とＳＫ450は重複する部分があるが、墓壙底の深いほうが先行する。また、溝中埋葬と考えられるＳＫ544は、ＳＫ540と切り合いがあり、ＳＫ544の方が新しい。

このような浅い墓壙が深いものより新しい傾向は、ＳＴ611の主体部ＳＫ547・494でも見られる。ＳＫ494は墳頂部の最も良い場所にあり深さも深い、この主体部と同じ深さを持つものにはＳＫ537があるが大形ではない。ほかの主体部は前述のものに比べ浅い。これもまたＳＴ610と同



第２図　池上遺跡出土弥生土器



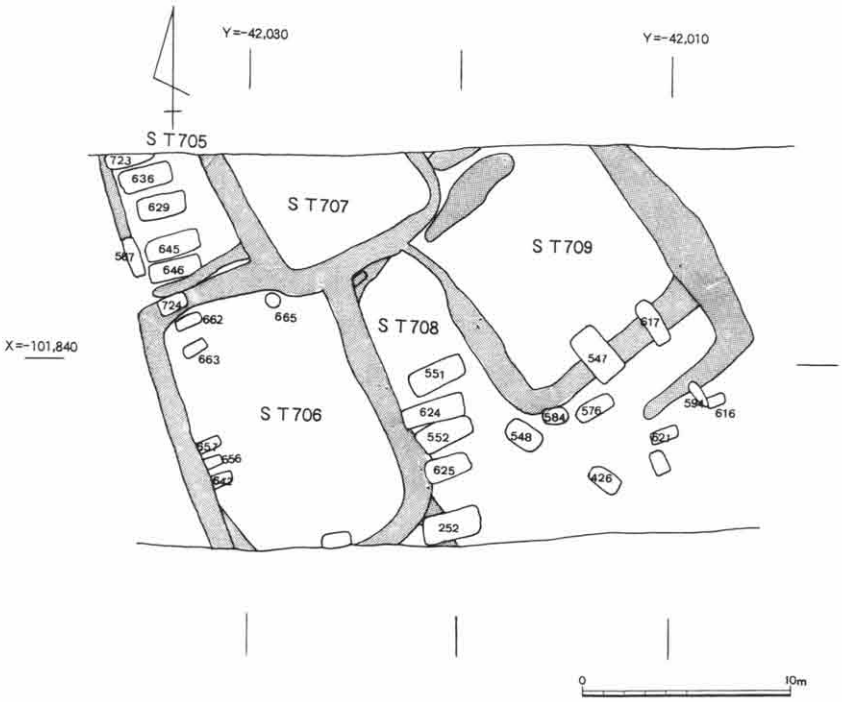
第３図　池上遺跡方形周溝墓平面図(1)

じである。

これまで述べてきたような現象は、墓壙掘り込み面の高さの違いを反映しているものと考えられる。墳丘を形成し埋葬した初期埋葬、溝の再掘削で出た土を盛り上げることにより高くなった墳丘に埋葬する改修時埋葬、周溝部が埋没し再掘削が行われなくなり、溝中埋葬が行われる周溝埋没時埋葬の時期が設定できる。

ＳＴ610・611に見られるような多くの埋葬主体部を検出した周溝墓の溝は、ほかの周溝墓の溝を利用した溝を除くと規模が小さく浅い傾向が認められる。このことは溝の廃土を墳丘盛土に使ったと想定すれば、墳丘自体の高さが、後述する中央の主体部が検出できない方形周溝墓に比べ低く、墓壙底の絶対高も低くなり、それゆえ墓壙が多く残ったと考えられる。このような現象は第12次調査でも認められる。

池上遺跡で検出された方形周溝墓には、ＳＴ707・709(第４図)のように墳丘の中央部分に主体部が見られない例がある。現在の遺構検出面の高さより高い位置に墓壙底があったものと考えられる。周溝の規模や形状から考えてみたい。ＳＴ707の溝の四隅は周辺の周溝墓ＳＴ706・709の溝を曲げている。墓域内では周溝墓として先行して造営されていたなどの理由から、一定尊重されていたものと考えられる。このような周溝墓では主体部が構築されなかったのではなく、削平されたと考えるのが合理的である。この地域で検出される周溝墓に先行する弥生時代の竪穴式住居跡は、周壁溝しか検出できないことから、この場所が大きく削平されていることを示している。また、周溝が現在の検出面から深いところで１ｍ程度の深さがあることから、掘削残土が盛られたと考えられる墳丘はさらに高かったと考えられる。



第４図　池上遺跡方形周溝墓平面図(2)

ＳＴ709は南東方向の溝が埋めたてられ、墳丘部が南東方向に拡張されていることが、遺構の切り合い関係と埋土の観察からわかった。南東部の拡張以前の墳丘を第１次墳丘部と呼ぶ。第１次墳丘では主体部が検出できず、南部が拡張された第２次墳丘部では、埋められた周溝に直交するように大型の墓壙ＳＫ547が検出できた。このことから解釈すると、ＳＴ709は、第１次墳丘に大規模な中央の主体部が、遺構検出面より高い場所に営まれており、その高い墳丘部を持った周溝墓の南東面の溝を埋め、拡張部が作られた。ＳＫ547は、池上遺跡でも最も検出面からの深さが深い墓壙の１つであることから、少なくとも拡張部は第１次墳丘より低かったと考えられる。第２次墳丘では拡張部に段差または傾斜があったものと考えられる。

近接するＳＴ708・705では周溝が完全にはめぐっていない。大きく削平されていることは前述したが、少なくとも溝がめぐっていてもその部分が浅かったこととして認識できる。また、周溝の多くは近接する周溝墓をめぐっている。ＳＴ708の墳丘部では、並行して墳丘の大部分を占める主体部が営まれて良好な状態で検出されていることから、隣接するＳＴ709の第１次墳丘より低いと考えられる。ＳＴ708の主体部には、溝が埋没した後に穿たれたものもあるが、墓壙底の高さはほかのものと比べて変わりなく、墳丘部の改修が大きく行われたとは考えられない。

ＳＴ705においても５か所の主体部が並列して検出されており、墓壙底の深さは25～35cmと大差がない。ＳＴ705には、南側に２本の溝が見られ、太い溝は細い溝より新しい。西側の溝は東のものに比べ細い。この２重の溝は太い方に改修された跡と考えられ、大形の方形周溝墓をめぐる方のみが太くされている。ＳＫ646は、南側の先行する細い溝との切り合い関係からみれば、後出する。改修の後、ＳＫ646が穿たれたにもかかわらず墓壙の深さは変わらないことから、ＳＴ706・707に土が盛られ、ＳＴ705には盛られなかったと考えられる。

３．小 結

我々が方形周溝墓を調査するとき、検出面と高さが変わらない墳丘部を検出するが、調査時の景観が当時のものとは異なっていることが想定できた。特に、池上遺跡のように埋葬主体部が状

態良く残っている遺跡では、主体部の切り合い関係や墓壙底の高さなどによって、喪失してしまった墳丘部の復原とその変遷過程を追うことができる。

墳丘の高さの違いは、検出状況では具体的にはわからないが、第12次調査の事例から見ると、近接する方形周溝墓であっても高低にかなりの差があったことがわかる。それは、周溝の掘削残土が盛られた墳丘と、盛られなかったものの差に起因する。ＳＴ709では墳丘自体が拡張されており、その拡張部が第１次墳丘に比べ低いと考えられることから、単純な方形台丘状の形態を示していたとは限らないと考えることが可能になった。ＳＫ547は遺跡内で検出できた墓壙の中では規模が大きく、小形壺を墓壙内に副葬品として持ち、拡張区の中央から第１次墳丘にかけての良好な場所にあるなどの特徴から、この被葬者の埋葬が拡張の契機になったものと考えられる。ＳＴ610・611の例を引くと、墳頂部中央に位置する主体部は最も大きいと考えられることから、調査データでは現れない大形の主体部の存在が想定できる。

方形周溝墓は、その平面的な面積の広さなどに階層差を見出しがちであるが、立体的な高さもまた重要な意味を持っていたものと考えられる。このことは小規模と考えられるＳＴ707の周溝が周囲の墓に主張するように四隅を持つことと、埋葬主体部が高い位置にあったことと考え合わせると、必ずしも面積が墓域内における墓の意味を規定するとは限らないことがわかる。

池上遺跡では前述したように竪穴式住居跡の削平から考えると、50cm以上の削平が想定できる。墓壙は残りの良いものであれば80cmの深さを持っている。このことから、少なくとも1.3m以上の深さの穴が穿たれていたことがわかる。最も一般的な墓壙でも検出面から25～60cmの深さを持つ。池上遺跡が元来持っていた深く遺体を安置するという特徴が、池上遺跡での埋葬主体部を多く検出することを可能にしたものと考えられる。このような墓壙のあり方がどの程度の地域的広がりがあるかについては、類例の増加と他地域との相互研究が必要となる。

（なかがわ・かずや＝当センター調査第２課調査第２係主任調査員）

参考文献

岸岡貴英　2003「池上遺跡14次」『埋蔵文化財発掘調査概報』　京都府教育委員会

谷口悌ほか　2000『池上遺跡発掘調査報告書－第３次・第４次調査－』　八木町教育委員会

田代弘　2002「池上遺跡第11次発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第104冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

田代弘・岡崎研一・野島永　2002「池上遺跡第８次発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第103冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

中川和哉ほか　2000「池上遺跡第５次発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第91冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

中川和哉ほか　2003ａ「池上遺跡第12次発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第108冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

中川和哉　2003ｂ「池上遺跡の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報』第87冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

鰭付円筒埴輪の形式分類とその変遷

筒井　崇史

1．はじめに

近年、円筒埴輪研究が盛んである。これには大きく２つの流れがある。１つは前期古墳の発掘調査や未報告資料の公表など、古相の埴輪資料が明らかになったことに伴う、前期の埴輪研究の流れである。これはおもに出現期から前期中頃までが対象となっている。(注1) もう１つは、埴輪の器面調整を中心に製作技法を詳細に検討し、その系統や変遷、技術伝播などについての研究の流れである。これはおもに中・後期の埴輪が対象となっている。(注2) ところが、両者の間に位置づけられる前期後半に代表的な鰭付円筒埴輪をめぐる研究は、近年、低調である。(注3)

本稿は、こうした研究の現状を受けて、京都府南部・奈良県・大阪府を中心とする近畿地方中央部、いわゆる畿内地方出土の鰭付円筒埴輪を対象とし、その形式分類と変遷について検討を行うものである。なお、紙幅の関係上、鰭付朝顔形円筒埴輪についての検討を行うことはできなかった。

2．鰭付円筒埴輪の形式分類

(1)円筒埴輪の分類

鰭付円筒埴輪の形式分類を行う前に、円筒埴輪全般の器種分類とその名称について、私案を示しておく(第１図)。また、私案における鰭付円筒埴輪の位置づけについても確認しておきたい。

円筒埴輪は、その形状、特に口縁部の形態から大きく５形式に分類する。(注4) ただ、本稿で検討する鰭付円筒埴輪については、この最上位段階の形式としては設定しない。これは、筆者が「鰭」はあくまでも円筒埴輪に付加されたものであるという立場をとるからである。したがって、鰭付円筒埴輪は、以下に設定する各形式にそれぞれ内包されることになるが、その形態的特徴から最上位段階の形式に近いものと位置づけることができる。ここでの分類は、土器の形式分類の「器種」に相当する。

特殊器台形円筒埴輪　口縁部に特殊器台形土器の特徴を残すもの。口縁部は、円筒部上端から外方へ短く屈曲したのち直立する。円筒部はほぼ正円筒形を呈し、一段おきに文様を施すが、新しい段階になると文様は失われる。スカシ孔には巴形・三角形がある。

器台形円筒埴輪　口縁部が円筒部上端から斜め外上方に大きく開くもの。口縁部の長さがやや長大なのが特徴である。円筒部は概ね正円筒形を呈するようである。スカシ孔は三角形が多い。管見によると、類例はそれほど多くないようである。

壺形円筒埴輪　従来、朝顔形円筒埴輪と呼ばれていたものであるが、近年の発掘調査では、円

筒部上に二重口縁壺形とは異なる形態の壺形を載せた朝顔形円筒埴輪の例が知られるようになった。(注5) 二重口縁壺形以外のものも含めて、朝顔形円筒埴輪と呼ぶのは必ずしも適切とは言えない。そこで、器台(＝円筒部)に壺(二重口縁壺・直口壺など)が載せられた状態が埴輪化されたものを、壺形円筒埴輪と総称してはどうであろうか。(注6) 円筒部は正円筒形や逆円錐台形を呈するものがある。スカシ孔は三角形・長方形・円形が主体である。なお、口縁部の形態(=壺形の形状)により形式の細分が可能である。

普通円筒埴輪　口縁部が上記の３形式にくらべて単純な形状を呈するもの。口縁部の形状は、円筒部からそのまま直立するもの、外反気味のもの、円筒部上端から斜め外方に短く開くものなどがある。また、緩く屈曲して段状をなす有段口縁もこの形式に含むものとする。円筒部は正円筒形や逆円錐台形を呈するものがある。スカシ孔は三角形・長方形・半円形・円形のほか、鍵形などもごくわずかであるが確認できる。

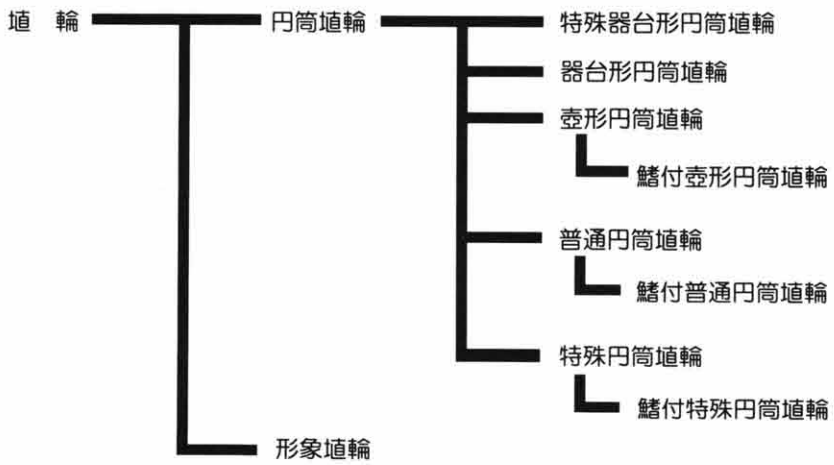
特殊円筒埴輪　口縁部の形状ではなく、上記の４形式に分類しにくいものを一括する。口縁部の形状は多様である。円筒部は横断面形が楕円形を呈するものが多い。スカシ孔は巴形・三角形・長方形・円形などがあり、スカシ孔の配置としては一段当たり多数穿孔される例が多い。また、突帯や鰭の貼り付け方もほかの４形式とは異なったパターンがみられる。

以上の５形式のうち、「鰭」を有する円筒埴輪は、壺形円筒埴輪、普通円筒埴輪、特殊円筒埴輪で確認できる。

(2)鰭付円筒埴輪の形式分類

鰭付円筒埴輪のみならず、円筒埴輪の形式分類に当たっては、円筒部における突帯の条数と段の構成数を最も重要な属性と捉えることができる。それは、この２つの属性によって円筒部の形態(○条○段構成かということ)が決定されると考えるからである。

このことに関連して、埴輪の祖形となった特殊器台形土器やその系譜を引く特殊器台形円筒埴輪では、文様帯の存在から、突帯の条数と段の構成数は自ずと規定されてしまう。ところが、特殊器台形円筒埴輪以降に成立したと考えられる埴輪の大半には、そのような規定は認められない。こうした状況は、奈良県メスリ山古墳のような超特大の円筒埴輪の場合には突帯数・段数の増加



第１図　円筒埴輪分類概念図

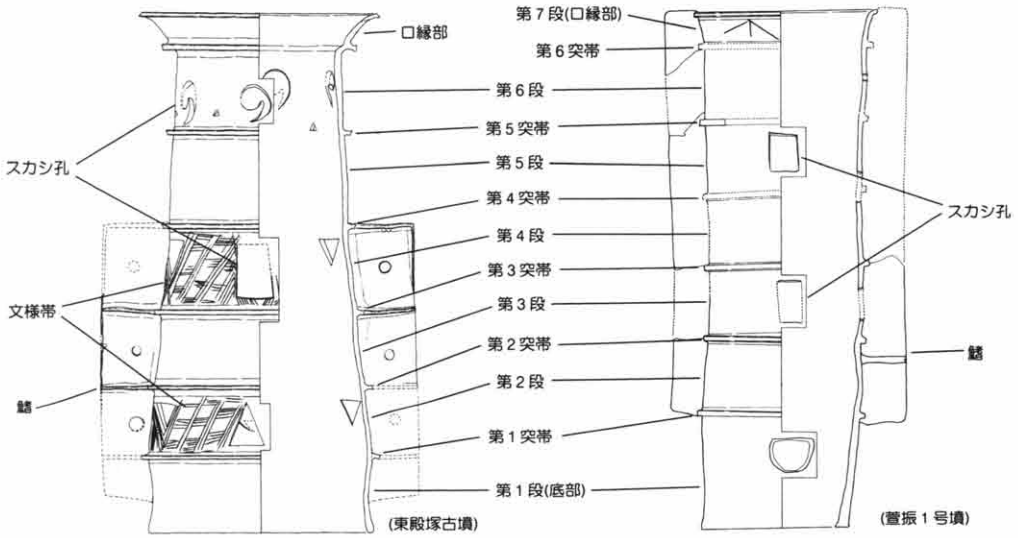
としてみられるが、多くの場合、突帯数・段数の減少という現象として現れてくる。筆者は、この段数の減少を製作段階における作業工程の省略に伴うものと考えている。したがって、円筒埴輪の形態は、製作の作業工程の変化と密接に関連している可能性が高く、今後、こうした視点からの検討が必要と考えられる。

本稿では、以上のような視点を持ちつつも、作業工程や製作技法に関する検討を十分に行うことはできなかったので、ここでは、実測図から読み取れる形態的特徴を中心に鰭付円筒埴輪の形式分類を行う(第3図)。また、記述に必要な各部の名称を第2図に示した。ただ、鰭付円筒埴輪の全体の段構成を知り得る資料はそれほど多くないため、以下に述べる形式分類でも形態復原は推定によるところが多い。一方、これまで円筒埴輪の分類や変遷の指標とされてきた器面調整や口縁部・スカシ孔の形状などについては、ここに示した形式(＝器種・器形)における型式やその変化を考える際の指標と考える。ここでの分類は土器の型式分類の「器形」に相当する。

鰭付特殊円筒埴輪A　5条6段構成のもの。口縁部は大きく外反するが、器台形円筒埴輪のような長大な口縁部とはならない。どちらかといえば、特殊壺形埴輪などの口縁部に類似する。スカシ孔は巴形・三角形・長方形があり、1段に5個以上穿孔される。類例がなく、奈良県東殿塚古墳出土資料(注7)の1例(報告番号1)のみである。

鰭付特殊円筒埴輪B　3条4段構成のもの。口縁部は受け口状を呈するものが多い。スカシ孔は三角形・長方形・円形があり、原則として最下段を除く各段に4個ないし6個穿孔される。これに分類されるのは、東殿塚古墳出土資料(報告番号2・3・4)のほか、可能性のあるものとして奈良県西山古墳出土資料(注8)(報告番号3・4)がある。西山古墳出土資料は、いずれも全容が明らかではないが、スカシ孔の構成が東殿塚古墳出土資料に類似することから同様に復原できる可能性がある。なお、西山古墳出土資料は、口縁部直下に突帯をめぐらすため1条多くなると考えられる。

鰭付特殊円筒埴輪C　2条3段構成または1条2段のもので、器高は30cmに満たない。器高の

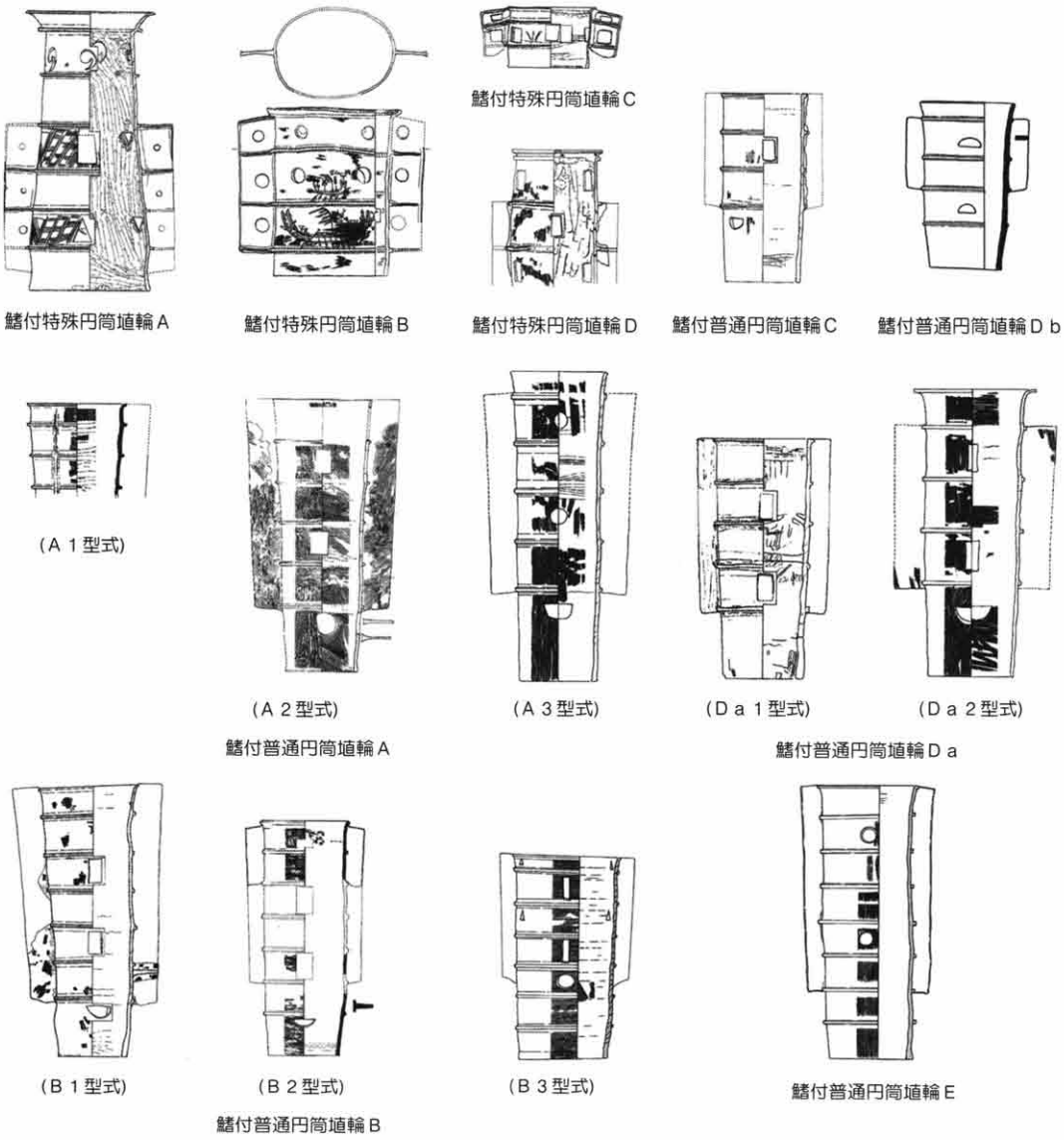


第2図　鰭付円筒埴輪各部名称

低さはほかに例をみない。これに分類されるものは、東殿塚古墳出土資料(報告番号５・６・７)のみで、ほかの古墳では確認されていない。

鰭付特殊円筒埴輪Ｄ　全体の形状をうかがえるものがないため、突帯数・段数とも明らかでない。口縁部は、受け口状または外反気味で端部をつまみ上げる。スカシ孔は長方形で、段ごとに４孔と２孔を繰り返して穿孔する。口縁部直下に突帯を有する点は鰭付特殊円筒埴輪Ｂ・Ｃにもみられる。これに分類されるものは、西山古墳出土資料(報告番号１・２)のみである。

鰭付普通円筒埴輪Ａ　５条６段構成のもの。口縁部は、外反するのものや直立するもの、「Ｌ」字状に外方へ屈曲させるもの、突帯を貼り付けるものなどがある。スカシ孔は三角形・長方形・円形・半円形が確認できる。また、鰭を第５突帯から貼り付けるものがある。これに分類されるのは、京都府瓦谷古墳群出土資料(注9)(報告番号107・111など)、奈良県上の山古墳出土資料(注10)(報告番号１など)、大阪府萱振１号墳出土資料(注11)(報告番号711など)などがあり、可能性のあるものとして



第３図　鰭付円筒埴輪形式分類図

京都府長法寺南原古墳出土資料(注12)(報告番号H4・H6・H11など)がある。また、畿外の例として、兵庫県五色塚古墳出土資料(注13)(報告番号2・3)などがある。

鰭付普通円筒埴輪B　6条7段構成のもの。基本的な特徴や法量は鰭付普通円筒埴輪Aに類似する。この形式にも第6突帯から鰭を貼り付けるものがある。これに分類されるのは、京都府瓦谷古墳群出土資料(報告番号104など)・庵寺山古墳出土資料(注14)(報告番号1～4)・黄金塚2号墳出土資料(注15)(報告番号N60・W1)、奈良県ナガレ山北3号墳出土資料(注16)(報告番号1・2)、大阪府萱振1号墳出土資料(報告番706～710など)などがある。

鰭付普通円筒埴輪C　3条4段構成のもの。口縁部は、「L」字状に外方へ屈曲させるものや突帯を貼り付けるものがある。スカシ孔は、長方形や半円形が確認できる。段構成や口縁部の特徴などから、大型品である鰭付普通円筒埴輪A・Bに対する小型品に位置づけられる。これに分類されるものとしては京都府瓦谷古墳群出土資料(報告番号99・160など)、大阪府摩湯山古墳出土資料(注17)などがある。

鰭付普通円筒埴輪D　4条5段構成のもの。法量が著しく異なることから大小の2形式が存在すると考えられる。大型品(Da)は、鰭付普通円筒埴輪A・Bに類似した特徴を持つ。また、鰭が第4段から貼り付けるものがある。Da形式に分類されるものとして奈良県寺口和田古墳群出土資料(注18)のほか、畿外の例となるが、兵庫県五色塚古墳出土資料(報告番号1)などがある。小型品(Db)は、確実な例は畿外の例となるが、5段のうち2段分にのみ矮小化した鰭を貼り付ける。この鰭は第4突帯から貼り付けられることが多い。Db形式に分類されるものとしては、三重県石山古墳出土資料(注19)、岡山県金蔵山古墳出土資料(注20)(報告番号1)などがあり、可能性のある畿内の例として、奈良県ノムギ古墳出土土資料(注21)(報告番号1～3など)がある。

鰭付普通円筒埴輪E　7条8段構成のもの。基本的な特徴は鰭付普通円筒埴輪A・Bに類似し、B形式の第1段に突帯を1条追加したような形式である。この形式に分類されるものは少なく、奈良県マエ塚古墳出土資料(注22)(2号円筒棺使用埴輪)がある。

3．鰭付円筒埴輪の変遷

本項では、前項での形式分類にしたがって鰭付円筒埴輪の変遷について検討していく。型式の抽出やその変遷は、口縁部やスカシ孔の形状、器面調整などから検討を行う。また、鐘方正樹氏が指摘された「鰭」の変化も鰭付円筒埴輪の変遷を考える上で重要である(注23)。

以下、各形式ごとにその変遷を明らかにするとともに、各形式の共伴関係、あるいは製作技法上の関連性について述べる。

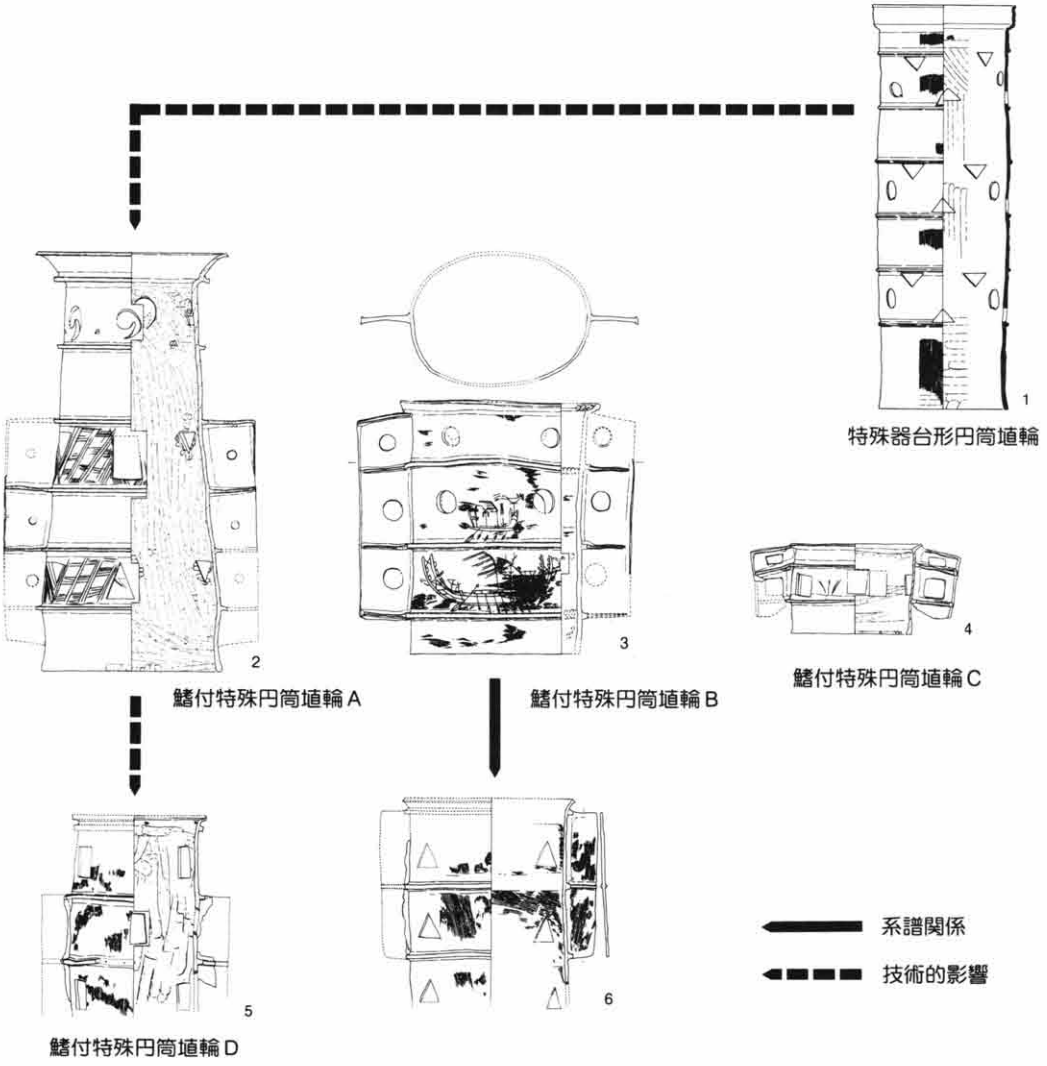
(1)鰭付特殊円筒埴輪(第4図)

鰭付特殊円筒埴輪A　本形式を円筒埴輪の系譜上に位置づける際の要素としては、鰭とスカシ孔の形状、および内面の調整である。鰭は鐘方氏の分類のⅠA類で、類似したものは、鰭付特殊円筒埴輪B・Cでのみ確認できる。スカシ孔は、巴形・三角形・長方形の3種類あり、前2者は

特殊器台形円筒埴輪にも類例がある。内面の調整は、頸部以下底部まで全面にケズリ調整を施す。内面全体にケズリ調整を施すことは、特殊器台形土器では多用されるが、埴輪では兵庫県権現山51号墳出土資料(注24)(復原による)などで確認できる程度である。

本形式は、突帯数や段数、口縁部の形状、さらには鰭の有無などの点で、特殊器台形円筒埴輪とは大きく異なるが、内面調整やスカシ孔の形状、外面の文様などに特殊器台形円筒埴輪の特徴がみられる。したがって、本形式は特殊器台形円筒埴輪と直接的な系譜関係にはないものの、その影響を受けていると考えられる。

鰭付特殊円筒埴輪B　本形式が出土した東殿塚古墳出土資料と西山古墳出土資料の先後関係については、鐘方氏や廣瀬覚氏の研究に詳しい(注25)。それによれば、東殿塚古墳出土資料が古く、西山古墳出土資料が新しく位置づけられ、筆者も同意見である。口縁部は、東殿塚古墳出土資料の受け口状から西山古墳出土資料の端部をややつまみ上げ気味の外反したものへと変化する。また、後者では、口縁部直下に突帯が付加される。ただし、口縁部直下に突帯を有する例は、東殿塚古



第４図　鰭付特殊円筒埴輪変遷概念図
１：京都府元稲荷古墳　　２～４：東殿塚古墳　　５・６：西山古墳

墳出土の鰭付特殊円筒埴輪Ｃの中にみられる(報告番号５・19・20など)。スカシ孔の配置パターンは両者の間で共通する。さらに、西山古墳出土資料の鰭は、鐘方氏の分類のＩＢ類で、東殿塚古墳出土資料よりも後出することが確認できる。

鰭付特殊円筒埴輪Ｃ　口縁部の形状を除けば鰭付特殊円筒埴輪Ｂを縮小化したものと考えられる。口縁部の形状は、円筒部の最上段の上部が強く斜め外方に屈曲するものである。これに類似した口縁部は、奈良県布留遺跡出土の特殊円筒埴輪や京都府寺戸大塚古墳出土の普通円筒埴輪などで確認できる。[注26]

鰭付特殊円筒埴輪Ｄ　本形式には内面全面にケズリ調整を施すものがある(報告番号２)ことや、鰭が口縁部から貼り付けられない点など、鰭付特殊円筒埴輪Ａに類似した特徴がみられる。スカシ孔の配置パターンはほかの形式にみられないが、１段おきに異なる点は、鰭付特殊円筒埴輪Ａの特徴に類似する。このように鰭付特殊円筒埴輪Ｄは鰭付特殊円筒埴輪Ａの影響を受けたと考えられる。ただ、それは直接的な系譜関係で結ばれるものではない。

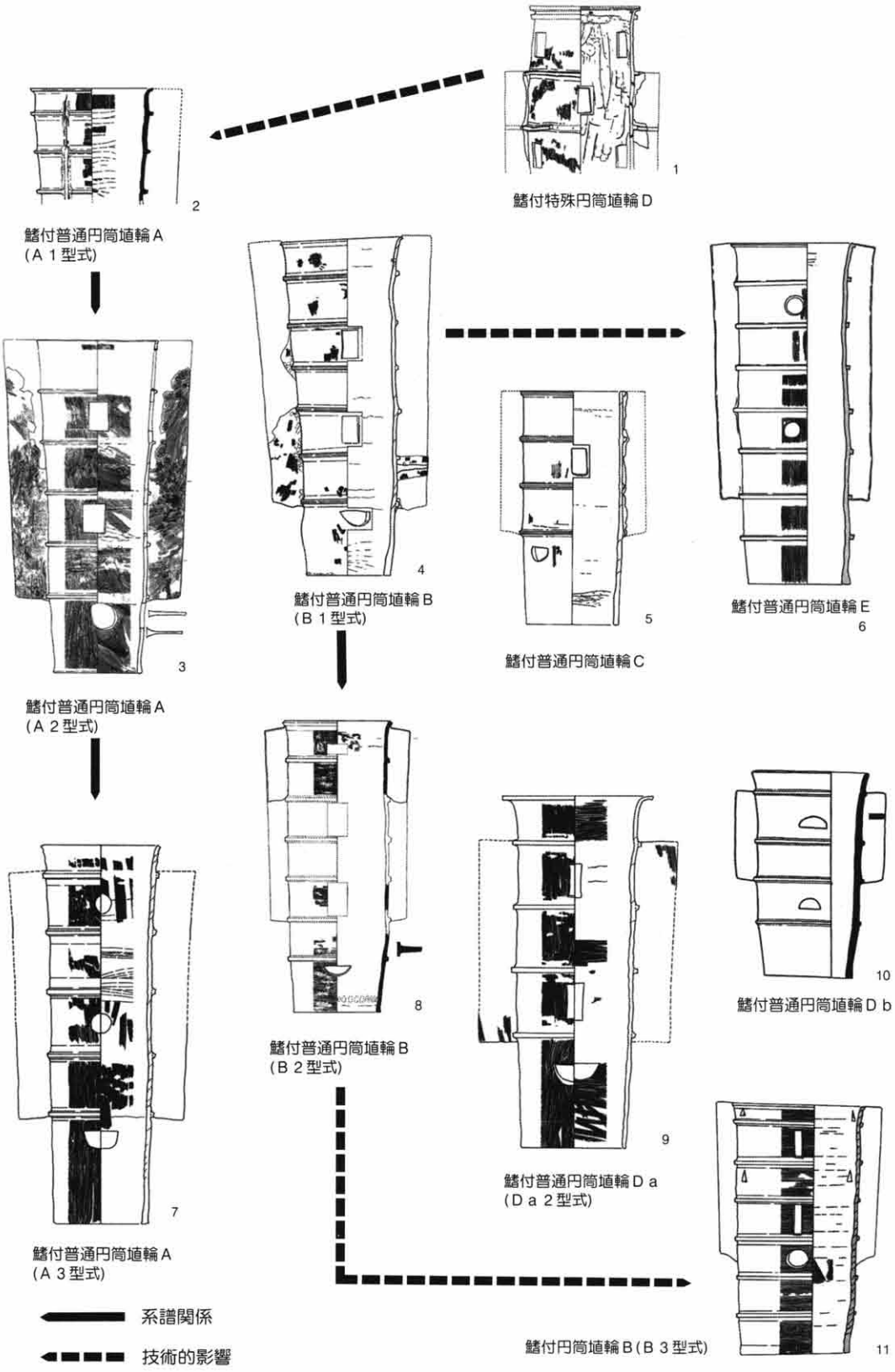
小結　以上、鰭付特殊円筒埴輪についてみてきたが、出土古墳がわずかに２基で、その出土数も少ないことから、第４図に示した相互の関係を普遍的なものとみることは難しいかもしれない。また、鰭付円筒埴輪の出現経緯についてもまだ不明な点も多く、今後の検討課題である。なお、両者の間には型式差を認めることができるが、ここでは１つの段階として捉えることにしたい。筆者は、この段階を、さまざまな形態の埴輪群を古墳の築造ごとに製作していた段階と評価すべきと考えており、この点については今回取り上げなかった特殊器台形円筒埴輪や器台形円筒埴輪、普通円筒埴輪などを加えて、より詳細に検討する必要がある。

(2)鰭付普通円筒埴輪(第５図)

鰭付普通円筒埴輪Ａ　鰭付普通円筒埴輪Ｂとともに最もポピュラーな存在である。口縁部の形状や鰭の貼り付け方などから大きく３型式が設定できる(Ａ１～Ａ３型式)。

Ａ１型式として、長法寺南原古墳出土資料がある。本資料には全体の形状がうかがえるような資料がなく、報告書では５条６段構成の復原案が示されている。口縁部は外反気味で、口縁端部をややつまみ上げるものが確認できるが、口縁部直下に突帯を有するものはみられない。スカシ孔は三角形・長方形・円形が確認できるが、鰭付普通円筒埴輪で三角形のスカシ孔を有する類例はそれほど多くない。内面の調整手法にケズリ調整は採用されていないようである。ちなみに鰭付普通円筒埴輪で内面全体にケズリ調整を施すものは確認できない。口縁部とスカシ孔の特徴は、西山古墳出土の鰭付特殊円筒埴輪に類似することから、両者の関連性を指摘できる。以上の点から、本資料は、Ａ２・Ａ３型式、あるいは鰭付普通円筒埴輪Ｂ～Ｅとくらべて古相の特徴を有すると考えられ、鰭付普通円筒埴輪のなかで最も古い型式に位置づけられると判断した。

Ａ２型式として、上の山古墳・萱振１号墳出土資料などがある。口縁部は外反気味のものや「Ｌ」字形に外方へ折り曲げるもの、突帯を貼り付けるものなどがある。スカシ孔には長方形・円形・半円形が確認できる。Ａ１型式の長法寺南原古墳出土資料の復原高(約70cm)にくらべると、大幅に器高が高くなっている(105cm前後)のが特徴である。口縁部の形状の違いにより、Ａ１型



第５図　鰭付普通円筒埴輪変遷概念図

１：西山古墳　２：長法寺南原古墳　３：上の山古墳　４：萱振１号墳　５：瓦谷古墳群
６：マエ塚古墳　７・９：五色塚古墳　８：庵寺山古墳　10：金蔵山古墳　11：ウワナベ古墳

式より後出すると考えられる。

Ａ３型式として、瓦谷古墳群出土資料のほか、畿外の例となるが、五色塚古墳出土資料がある。口縁部の特徴はＡ２型式に類似するが、鰭の上端が第５突帯から貼り付けられる。スカシ孔の形状は長方形・円形が確認できる。鰭の貼り付け方からＡ２型式よりも後出すると考えられる。

鰭付普通円筒埴輪Ｂ　鰭付普通円筒埴輪Ａと同様、口縁部の形状や鰭の貼り付け方から大きく３型式が設定できる（Ｂ１～Ｂ３型式）。

Ｂ１型式としては、萱振１号墳出土資料をはじめ、瓦谷古墳群・黄金塚２号墳・ナガレ山北３号墳出土資料などがある。鰭付普通円筒埴輪の中では最も出土数の多い型式と考えられる。突帯数・段数を除けば、鰭付普通円筒埴輪Ａ２型式と共通する特徴が多い。スカシ孔は長方形・円形・半円形が確認できる。本型式は、古墳での共伴関係やその特徴から鰭付普通円筒埴輪Ａ２型式と共伴すると考えられる。

Ｂ２型式としては、庵寺山古墳出土資料がある。これは口縁部外面に貼り付けた突帯の直下、あるいは第７段の途中から鰭を貼り付けるものである。スカシ孔は、長方形・半円形・円形が確認できる。円筒部の形状もＢ１型式などとは異なり、逆円錐台形状を呈する。Ｂ２型式は、その特徴からＢ１型式よりも後出すると考えられる。また、Ａ２型式とＡ３型式の中間的な特徴を有する。

Ｂ３型式として、ウワナベ古墳出土資料がある。同資料には黒斑がみられないことから窖窯で焼成されたと考えられる。鰭の下端が斜めもしくはゆるい「Ｓ」字状を呈する。スカシ孔は円形もみられるが、長方形や小型化した三角形などがあり、古相の鰭付円筒埴輪の特徴を有している。しかし、円筒部の形状が直径の割りに低い器高となっており、形態上、新しい段階のものと考えられる。Ｂ３型式は、窖窯で焼成されたと考えられることから、鰭付円筒埴輪の中では、最も新しい段階に位置づけられる。なお、Ｂ２型式とＢ３型式の間には、形態上の連続性が認められないため、両者は直接的な系譜関係にない可能性が高いと考えられる。

鰭付普通円筒埴輪Ｃ　出土数はあまり多くないようである。本形式は先に指摘したように、鰭付普通円筒埴輪Ａ・Ｂの小型品と考えられることから鰭付普通円筒埴輪Ａ２型式、あるいはＢ１型式と時間的に併行し、形式的変化の乏しさからその存続期間は短かったと考えられる。

鰭付普通円筒埴輪Ｄ　形式分類の項でも述べたように、さらに２つの形式に細分することができる。Ｄａ形式の形態的な特徴は鰭付普通円筒埴輪Ａ・Ｂに類似する。鰭の貼り付け方から２型式が設定できる（Ｄａ１・Ｄａ２型式）。Ｄａ１型式は鰭が口縁部から貼り付けられるもので、寺口和田古墳群出土資料などがある。Ｄａ２型式は第４突帯から鰭を貼り付けるもので、五色塚古墳出土資料などがある。形態的特徴からＤａ１型式は、鰭付普通円筒埴輪Ａ２型式、あるいはＢ１型式と併行し、Ｄａ２型式は、鰭付普通円筒埴輪Ａ３型式と併行すると考えられる。

Ｄｂ形式は、Ｄａ形式にくらべ小型品で、鰭も矮小化している。金蔵山古墳では本資料の上に蓋形埴輪を載せており、使用方法が一般の円筒埴輪とは異なっている。Ｄｂ形式は、鰭付普通円筒埴輪Ａ３型式、Ｄａ２型式と併行すると考えられる。

鰭付普通円筒埴輪Ｅ　本形式は、類例がほとんどみられないが、その特徴から鰭付普通円筒埴輪Ｂ１型式から影響を受けて成立したと考えられる。

小結　以上、鰭付普通円筒埴輪を形態や法量などから６形式に分類し、その特徴をみてきた。各形式間には共通した特徴がみられ、古墳における共伴関係と合わせて、４段階の変遷過程が明らかとなる。まず、第１段階としては、鰭付普通円筒埴輪Ａ１型式がもっとも古く位置づけられる。Ａ１型式の特徴から、鰭付特殊円筒埴輪Ｄ形式との関連が考えられるので、Ｄ形式に続いて鰭付普通円筒埴輪Ａ１型式が出現したと考えられる。第２段階はＡ２型式、Ｂ１型式、Ｃ形式、Ｄａ１型式、Ｅ形式から構成される。この段階は多くの形式が確認でき、その各部の特徴は共通している。高橋克壽氏により、「斉一的な鰭付円筒埴輪」(注27)と呼ばれた一群に相当する。ただ、各形式が鰭付普通円筒埴輪Ａから派生したのか、あるいは一般的な普通円筒埴輪に鰭を付加することで出現したのかについては、今後の検討課題である。第３段階は、Ａ３型式、Ｂ２型式、Ｄａ２型式、Ｄｂ形式から構成される。この段階の特徴は、鰭の張り付けが口縁部ではなく上から最上段の突帯から始まる点にある。第４段階には、窖窯焼成によると思われるＢ３型式が位置づけられる。

鰭付普通円筒埴輪の変遷は、大きく４段階に区分することができた。しかし、これをそのまま様式とすることが可能かどうかについては、普通円筒埴輪や壺形円筒埴輪との器種構成をより詳細に検討する必要がある。ただ、資料数や形式数の多い第２・３段階については、鰭付普通円筒埴輪の最盛期と捉えることができ、個々の古墳の枠を越えて、広範囲に鰭付普通円筒埴輪・普通円筒埴輪・壺形円筒埴輪の形態的特徴が概ね斉一化された段階と評価できると考えている。

５．ま と め

以上、鰭付円筒埴輪について検討を行った結果、多数の形式・型式を確認し、その変遷について筆者の考えを明らかにしてきた。その消長を改めて概観すると、まず、出現期(鰭付特殊円筒埴輪・鰭付普通円筒埴輪第１段階)は、埴輪の数そのものがそれほど多くなかったと考えられ、また、古墳ごとに埴輪が製作されていた段階ではないかと考えられる。最盛期(鰭付普通円筒埴輪第２・３段階)は、さまざまな形式の鰭付円筒埴輪が広い地域の多数の古墳で製作されていた段階と考えられる。消滅期(鰭付普通円筒埴輪第４段階)は、窖窯焼成による鰭付普通円筒埴輪を最後とするが、出土古墳はごくわずかである。なお、副葬品やそのほかの出土遺物から得られる各段階の年代観について述べる。鰭付特殊円筒埴輪については、古墳時代前期前半～中頃の年代観が得られる。また、鰭付普通円筒埴輪については、第１段階は前期中頃、第２段階は前期後半～末、第３段階は中期初頭、第４段階は中期前半～中頃の年代観が得られる。ただ、ここで示した年代観はあくまでも推定の域をでないものである。

以上のような消長は、鰭付ではない円筒埴輪と合わせて検討することで、はじめて円筒埴輪編年として確立することができることは言うまでもない。筆者としては、今回の検討は、円筒埴輪編年作成のための一作業と位置づけることにしたい。また、今回は製作技法や生産体制などにつ

いて踏み込んだ検討ができなかった。この点についても機会を改めて検討することにしたい。

（つつい・たかふみ＝当センター調査第２課調査第２係調査員）

注１　近年の代表的な調査報告書・研究論文として以下のものがある。

豊岡卓之ほか『中山大塚古墳』（『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第82冊　奈良県立橿原考古学研究所）　1996

鐘方正樹「前期古墳の円筒埴輪」（『堅田直先生古希記念論文集』）　1997

松本洋明・青木勘時ほか『西殿塚古墳・東殿塚古墳』（『天理市埋蔵文化財報告書』第７集　天理市教育委員会）　2000

竹谷俊夫・廣瀬覚「天理西山古墳外提出土の埴輪棺墓について」（『天理参考館報』第13号　天理参考館）　2000

梅本康広ほか『寺戸大塚古墳の研究Ⅰ　第６次調査報告編』（『向日丘陵古墳群調査報告』第１冊（財）向日市埋蔵文化財センター）　2001

安村俊史ほか「玉手山古墳群の研究Ⅰ－埴輪編－』（柏原市教育委員会）　2001

豊岡卓之「特殊器台と円筒埴輪」（『橿原考古学研究所紀要　考古學論攷』第26冊）　2003

廣瀬覚「摂津猪名川流域における前期古墳の埴輪とその系譜」（『古代文化』第55巻第９号　（財）古代學協會）　2003

埴輪検討会編『埴輪論叢』第１～５号　1999～2003

注２　近年の代表的な研究論文として以下のものがある。

鐘方正樹「中期古墳の円筒埴輪」（『史跡大安寺旧境内Ⅰ』（『奈良市埋蔵文化財調査研究報告』第１冊）　奈良市教育委員会）　1997

第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会編『埴輪　発表要旨集』　2003

埴輪検討会編『埴輪論叢』第１～５号　1999～2003

注３　前期全般にわたる円筒埴輪を扱かったものとして次の文献がある。

注１鐘方文献

鐘方正樹「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」（『埴輪論叢』第４号　埴輪検討会）2003

注４　円筒埴輪の分析に当たっては、従来、口縁部・突帯・スカシ孔の形状や内外面の調整、焼成など、いくつかの属性を抽出し、その組み合わせや特徴によって、埴輪を分類し、各属性間の新古関係から埴輪の先後関係を明らかにし、埴輪の編年を行う、という方法が一般的である。これはすでに川西宏幸氏が「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第２号　日本考古学会　1978）の中で用いられた方法である。これに対して、筆者は、円筒埴輪そのものの形態による分類を行い、上記、諸属性をもとにその変遷について検討するという方法を採ることにした。ここで強調しておきたいのは、突帯の条数、段の構成数を基準とする分類段階を設定した点にある。なお、円筒埴輪の形態による研究視点を重視する必要性については、坂靖氏によって早くから指摘されている。

坂靖「埴輪の規格性」（『考古学と技術』（同志社大学考古学シリーズ』Ⅳ）　同志社大学考古学シリーズ刊行会）　1988

坂靖「奈良県の円筒埴輪」（『橿原考古学研究所論集』第11　吉川弘文館）　1994　など

注５　近年出土のものとしては、寺戸大塚古墳や東殿塚古墳に直口壺形のものがある。また、従来から知られているものとして、丹後地方の無頸壺形のもの（丹後型円筒埴輪）や山陰地方の複合口縁壺形の

ものがある。

注６　形象埴輪の壺形埴輪とは円筒部の有無によって区別される。壺形埴輪の場合、蓋形埴輪のように基台のみであるが、壺形円筒埴輪の場合、複数の段構成をとる円筒部がある。

注７　注１松本・青木文献

注８　注１竹谷・廣瀬文献

注９　石井清司・筒井崇史ほか『瓦谷古墳群』（『京都府遺跡調査報告書』第23冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1996

注10　木下亘ほか「上の山古墳」（注１豊岡ほか文献所収）

注11　広瀬雅信・高橋克壽ほか『萱振遺跡』（『大阪府文化財調査報告書』第39輯　大阪府教育委員会）　1992

注12　都出比呂志・福永伸哉ほか『長法寺南原古墳の研究』（『長岡京市文化財調査報告書』第30冊　長岡京市教育委員会）　1992

注13　喜谷美宣「市街地に消えた古墳－念仏山古墳－」（『研究紀要』第６号　神戸市立博物館）　1989

注14　杉本宏「庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要」（『宇治市埋蔵文化財調査概報』第15集　宇治市教育委員会）　1990

注15　伊達宗泰編『黄金塚２号墳の研究』（『花大考研報告』10　花園大学　黄金塚２号墳発掘調査団）　1997

注16　伊達宗泰・赤塚次郎「別所下39号古墳出土の円筒埴輪」（『古代学研究』96号　古代學研究會）　1981

注17　野上丈助『大阪府の埴輪』（大阪府立泉北考古資料館）　1982

注18　原報告書に当たることができなかったので、以下の文献を参照した。
小栗明彦「大和の円筒埴輪編年」（『埴輪論叢』第５号　埴輪検討会）　2003

注19　京都大学考古学研究室編『紫金山古墳と石山古墳』（『京都大学文学博物館図録』第６冊　京都大学文学部博物館）　1993

注20　西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』（『倉敷考古館研究報告』第１冊　倉敷考古館）　1959

注21　岡林孝作「大和古墳群（ノムギ古墳隣接地）発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1996年度　奈良県立橿原考古学研究所）　1997

注22　中井一夫「マエ塚古墳外堤」（『奈良県古墳発掘調査集報』Ⅱ（『奈良県文化財調査報告書』第28集）奈良県教育委員会）　1976

注23　注１鐘方文献参照。

注24　近藤義郎ほか『権現山51号墳』（『権現山51号墳』刊行会）　1991

注25　注１鐘方文献、同竹谷・廣瀬文献参照。

注26　置田雅昭「初期の朝顔形埴輪」（『考古学雑誌』第63巻第３号　日本考古学会）　1977、注１梅本文献参照。

注27　高橋克壽「埴輪生産の展開」（『考古学研究』第41巻第２号　考古学研究会）　1994

4．野条（のじょう）遺跡第８次

所 在 地　船井郡八木町大字野条小字大入道７－１ほか

調査期間　平成15年４月21日～９月16日

調査面積　約1,200㎡

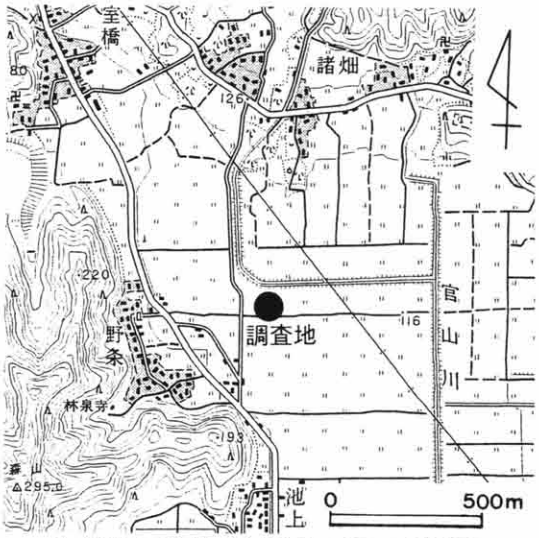
はじめに　野条遺跡は、亀岡盆地の北端に位置する筏森山東麓に形成された集落遺跡である。主要地方道亀岡園部線改良工事に先立って調査を実施した。

調査概要　Ａ・Ｂ地区の２つの調査地区を設定した。遺構直上面までの土層を重機で除去した後、人力で遺構・遺物の検出に努めた。調査の進捗に応じて、随時、実測、写真撮影などの記録作業を行った。作業の結果、各地区において以下のような遺構を検出した。

Ａ地区　竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、大形の土坑、ピットなどを検出した。竪穴式住居跡は方形で、一辺が約７ｍである。住居の床面には、周壁溝・貯蔵穴・炉跡・柱穴などが設けられていた。弥生時代後期の土器類が少量出土した。掘立柱建物跡は、２棟を検出した。１棟は、２間×３間の東西に主軸をもつ掘立柱建物跡である。もう１棟は、２間×３間の南北棟である。中世の建物跡である。土坑には大小があり、浅くて不定形なものと、礫層に達するほど深く掘られた円形のものとがある。前者は中世の遺物を含む。後者は時期が明らかなものはないが、竪穴式住居跡建築の際に壊されているので、弥生時代後期以前に属する可能性がある。そのほか調査地北端において、畑作の痕跡と推定される中世の溝群を検出した。

Ｂ地区　この地区では、Ａ地区同様に、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、大形の土坑、ピットなどを検出した。竪穴式住居跡は、一辺が５ｍの方形の住居跡である。焼土に埋もれており、多数の弥生土器を検出した。火災にあって燃え落ちた家屋と推測される。床面には、周壁溝、特殊な形状をもつ炉、柱穴などが設けられていた。弥生時代後期の住居である。掘立柱建物跡は、２間×３間の南北に主軸をもつ掘立柱建物跡である。大形土坑群は、Ａ地区と同じく、弥生時代後期の住居跡よりも古いものが認められた。

まとめ　Ａ・Ｂ両地区で弥生時代後期、中世の掘立柱建物跡が検出されたことで、野条遺跡は弥生時代後期に形成され、中世に及ぶ集落遺跡であることが明らかになった。　（田代　弘）



調査地位置図（国土地理院1/25,000殿田）

5．池上遺跡第16次・野条遺跡第９次

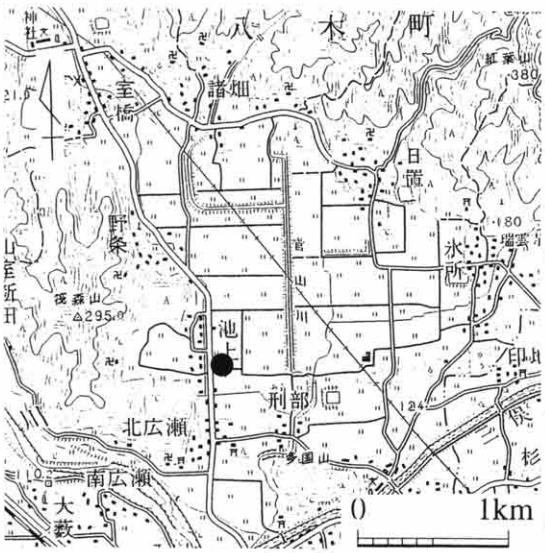
所 在 地　船井郡八木町池上・野条地内

調査期間　平成15年５月26日～７月30日

調査面積　約550m²

はじめに　今回の発掘調査は、京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けた、府営ほ場整備事業（川東地区）に伴う発掘調査である。遺跡の所在する池上地区は、亀岡盆地の北端に位置し、その中でもさらに山に囲まれた小盆地状を呈する地域に在る。池上遺跡はこれまで、八木町教育委員会・京都府教育委員会・当調査研究センターによって計16回の発掘調査が行われている。その結果、旧石器時代から中世にかけての大規模遺跡であることがわかった。特に弥生時代と古墳時代は、亀岡盆地の中でも有力な集落であったと考えられる。

調査概要　発掘調査は、ほ場整備に伴う用水路の設置によって遺構が破壊される危険性のある部分や切り土によって遺構が喪失する部分を対象とした。そのため、調査トレンチの多くは、幅２～３ｍの縦に長いものとなった。対象地区北部の調査区は、池上遺跡と接する野条遺跡内となるため、野条遺跡第９次調査とした。調査区は、池上遺跡では第１～４トレンチ、野条遺跡では第１・２トレンチに分けて発掘調査を実施した。



調査地位置図（国土地理院1/50,000京都西北部）

池上遺跡の第１トレンチは、昨年度の第６トレンチの北に位置する調査区で、古墳時代の竪穴式住居跡、弥生時代の土壙などが検出できた。調査トレンチが狭く大形の遺構の全貌がわからないが、池上遺跡内においては、最も北で発見された竪穴式住居跡である。第２トレンチでは、旧流路と中世の溝が検出された。このほかのトレンチでは、遺構の密度が低いが、溝や土坑などが検出された。

野条遺跡の第２トレンチでは幅２ｍ以上の溝を検出しており、溝内からは律令期の土器とともに布目瓦が発見されている。

（中川和哉）

6．芝山（しばやま）遺跡

所 在 地　城陽市富野上ノ芝

調査期間　平成15年４月16日～８月13日

調査面積　約1,800㎡

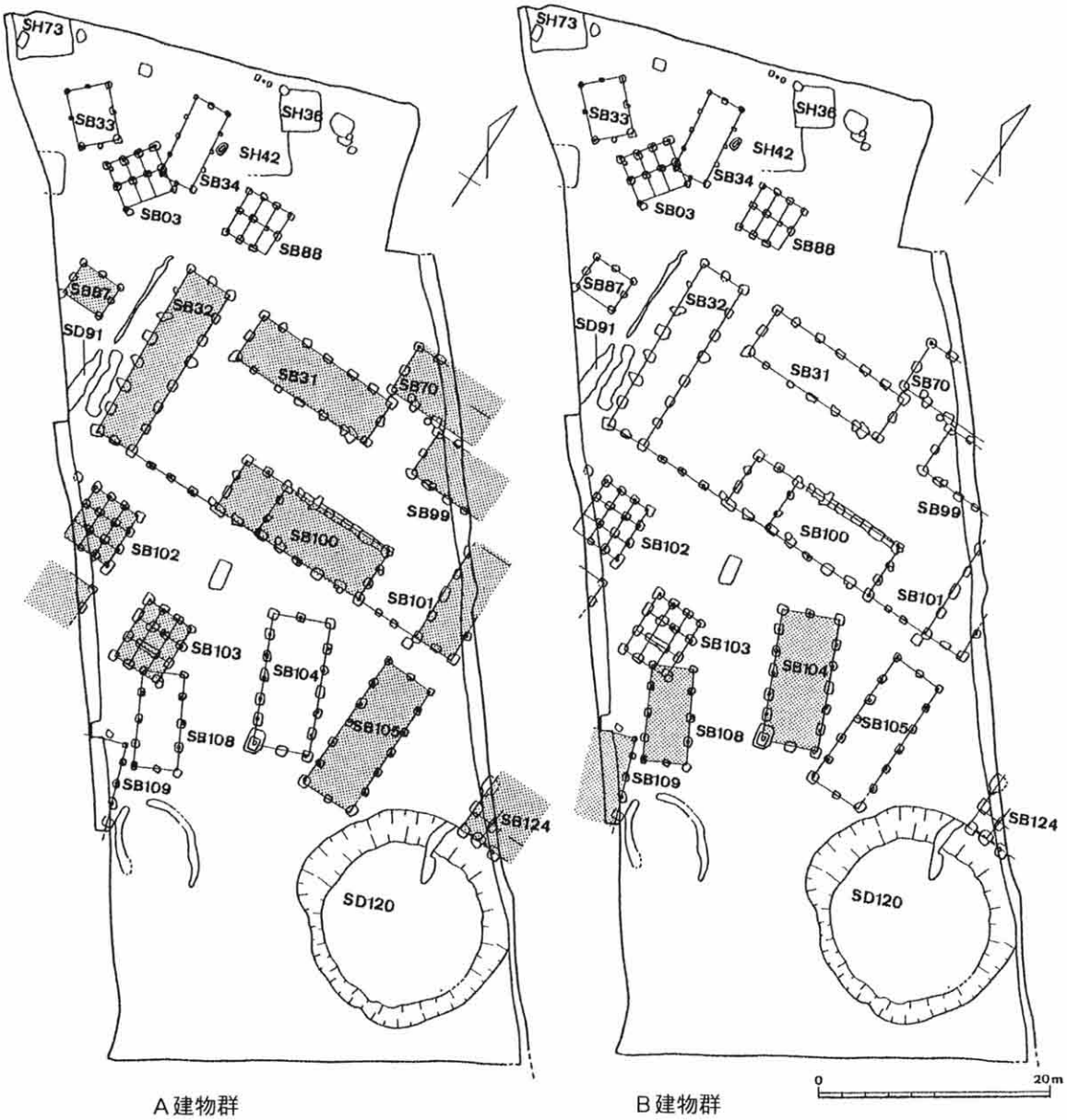
はじめに　今回の調査は府道の建設に伴い、京都府宇治土木事務所の依頼を受けて平成13年度から実施して来たものである。平成14年度は、主に事業地の南側を中心に調査を行い、５世紀後半の方墳や８世紀後半～９世紀初頭の集落の一角を確認した。Ａ地区は事業地の北端にあたり、平成14年度に、北側を中心に約800㎡の調査を行い、調査地の南側では真南北に向く東西棟の建物跡と南北棟の掘立柱建物跡が見つかった。この結果を受けて、今年度はその南側に展開すると思われる建物跡の範囲確認を目的として約1,000㎡の調査を行った。また、Ａ地区南側の調査区（Ｈ地区）では、昨年度に引き続き試掘調査を行った。

調査概要　今回検出したＡ地区の遺構は、古墳時代と飛鳥～奈良時代の遺構に分けられる。古墳時代の遺構は直径が約16ｍを測る円墳（芝山古墳群第Ｉ支群11号墳）がある。墳丘は、後述する８世紀前半の建物群の造営により完全に削平され、周溝も埋没していた。古墳の造営時期については６世紀前半代と考えているが、周溝の埋没過程で混入した６世紀後半の遺物や、建物群造営の地業に伴う７世紀末～８世紀にかけての遺物もわずかに出土している。

飛鳥～奈良時代にかけての遺構には、掘立柱建物跡群がある。全部で14棟確認したが、建物の主軸が真南北に向く一群（Ａ建物群）と、西側に振れるもの（Ｂ建物群）がある。そのなかでＡ建物群は11棟あり、東西棟建物のＳＢ100を中心に、その東西に長舎風の南北棟建物（ＳＢ32・101）を配し、ＳＢ100の北側にはＳＢ31・99の２棟の東西棟の建物が並ぶ、整然とした「コ」字形配置をなす。この主要建物の南側には、東側で南北棟の長舎風建物跡（ＳＢ105）、西側で総柱建物跡２棟（ＳＢ102・103）がある。Ａ建物群には、円墳の周溝を切って掘削された建物（ＳＢ124）もある。また、ＳＢ100の南側にはＢ建物群３棟がある。建物群の時期については、柱掘形内の出土遺物から、Ａ建物群が８世紀前半、Ｂ建物群が８世紀後半と考えている。ただしＡ建物群については建物（ＳＢ31・70・99）が近接するものも見られ、さらに細分できる可能性がある。

第１図　調査地位置図（国土地理院1/25,000宇治）

Ａ地区の南側に位置するＨ地区では６世紀後半頃の竪穴式住居跡１基や９世紀前半の掘立柱建物



第２図　建物群変遷図(案)

跡４棟などを確認した。

まとめ　今回の調査では、６世紀前半の円墳を確認したほか、飛鳥～奈良時代前半の建物跡群が見つかった。建物の性格としては、①地方の行政区画である郡の役所、②駅家、③在地の豪族居館、などが考えられる。

今回確認した建物の範囲は、東西約40mを測るが、調査地外の東西に続く平坦な地形や、調査区外へのびる建物遺構の広がりから、建物群の範囲は拡大する可能性がある。しかし、A建物群に伴う区画溝や門などの施設は確認できなかった。これは現況で竹薮直下が遺構検出面となっており、同一面で近世以降の耕作溝群も多数見られたことから、建物群の廃絶後に大規模な削平がなされたため検出できなかったことも考えられる。

（柴　暁彦）

府内遺跡紹介

97. 畑ノ前遺跡

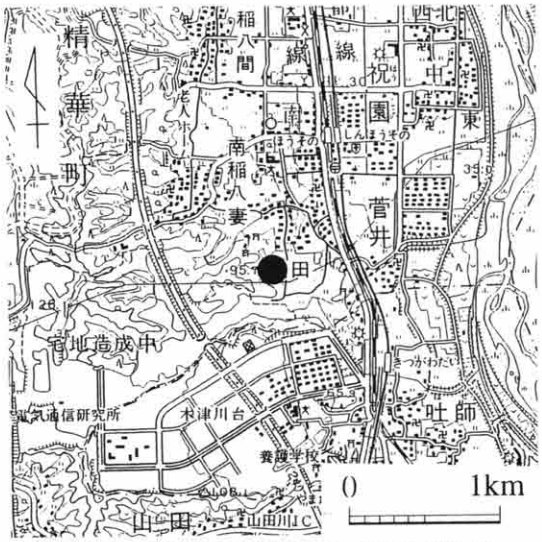
今回紹介する畑ノ前遺跡は、精華町の精華台ニュータウンの造成に伴い、昭和59～61(1984～1986)年度にかけて発掘調査が行われ、弥生時代中期の竪穴式住居跡群のほか、古墳時代後期の古墳群、奈良時代の建物跡群など、各時期の遺構・遺物が多数見つかり、大規模な複合遺跡であることが判明した。(注1) この調査で、特に注目される成果としては、掘立柱建物跡や多数の柱穴・井戸・土坑・溝などが集中して見つかった奈良時代の遺構群がある。

掘立柱建物跡は、総計23棟が検出され、丘陵平坦地の約70m四方の範囲にまとまって配置されている。これらの建物群の周囲には、北側に東西方向の溝があるものの、そのほかの三方には、明確な区画施設はなかったものとされる。

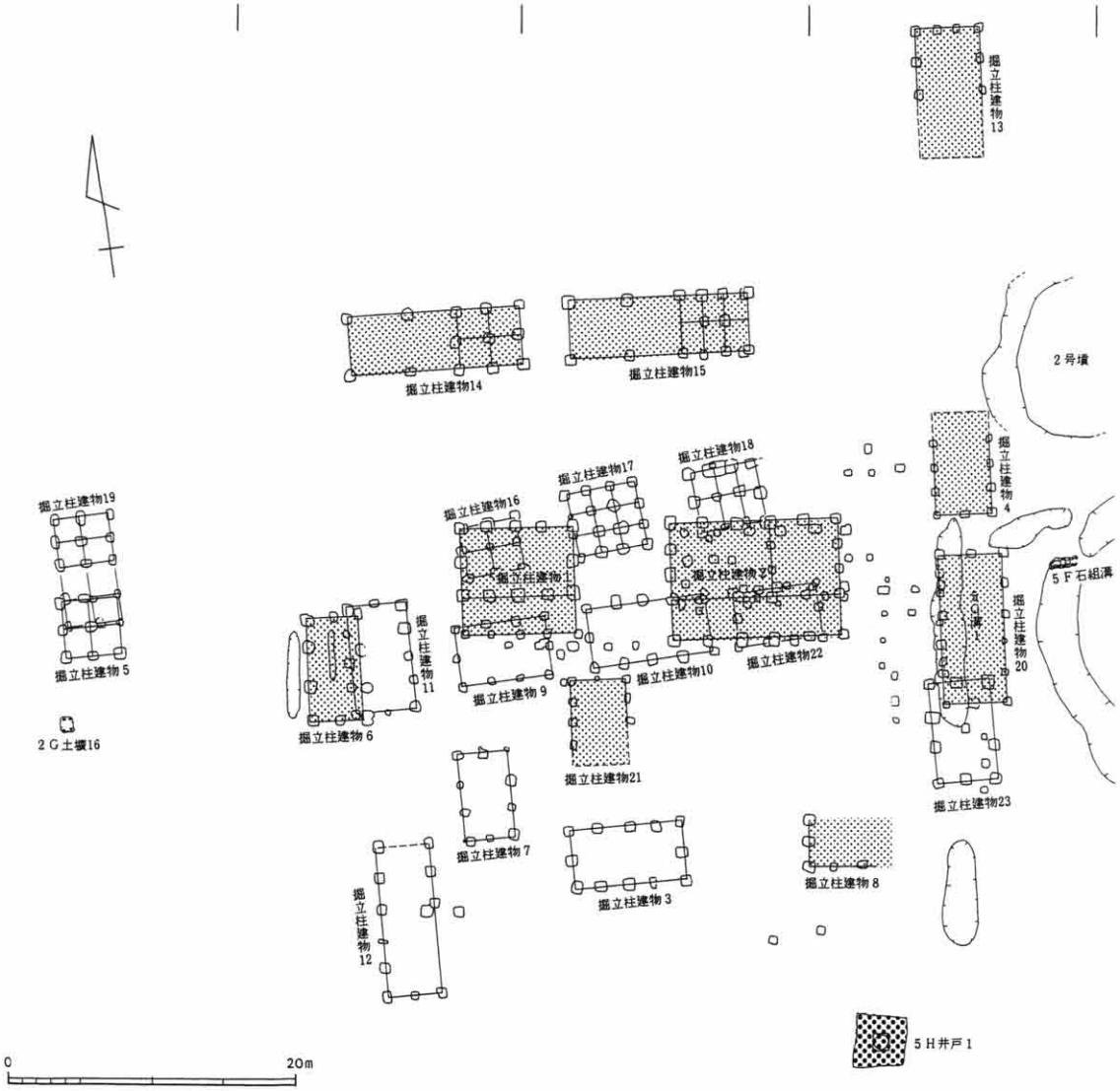
建物群は、方位の異同や配置の規格性から５群に分類され、大きく３時期の建物配置の変遷があったことが想定されている。(注2) このうちⅢ期とされるグループは、住居と推測される８棟(Ａ群)と倉庫建物の２棟(Ｄ群)を、10尺の方眼地割上に計画的に配置したもので、もっとも整備された段階とされる。すなわち、建物群の中央に桁行５間、梁間４間で南面に廂をもつ主殿と思われる東西棟の建物を配し、その西側に、主殿に比べ少し規模は小さいが、同じく南廂の東西棟建物を並置する。これらの中核建物の周りを囲む形で、やや規模の小さな南北棟建物を左右と南前面に配置し、さらに、北側にも東西棟の倉庫建物２棟を配置するもので、いわゆる官衙ないしは居館風の建物配置を構成する。

出土遺物の中には、平城宮と同笵の軒瓦類が含まれるが、瓦全体の出土数は少なく、屋根の全面に瓦を葺く建物は無かったと考えられる。

このほか建物群の南東方向では、深さ７ｍに達する井戸が検出されている。井戸の掘形は一辺3.5mの方形で、内部に上下２段の井戸枠をもつ。上段の井戸枠はヒノキ材を用いた横板井籠組で、内法は一辺1.1mを測る。下段には長さ約3.5m、直径約１ｍのヒノキの丸太を刳り抜いた井筒が使用されていた。下部に数か所の孔が穿たれており、導水管として利用されていたものが、井筒に再利用されたものと考えられているが、当時の刳り抜き式の井筒としては最大級である。木材の太さか



第１図　位置図(国土地理院1/50,000奈良)



第２図　掘立柱建物跡群の配置図(網点はⅢ期建物群。注１文献第89図に加筆)

ら見て、おそらく転用される以前は、寺院や宮殿建物の柱として使われていた可能性も考えられる。井戸は、８世紀前葉に掘削され、同末葉の時期に埋没したものと推測されている。

以上紹介した奈良時代の掘立柱建物群については、同町の「北稲八間(きたいなやづま)」や「南稲八妻(みなみいなやづま)」の地名に残る、奈良時代後期に活躍した在地豪族、稲蜂間(いなはちま)氏の居館にあてる説が有力視されている。

(辻本和美)

注１　精華町教育委員会・(財)古代學協会『京都府(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書－煤谷川窯址・畑ノ前遺跡－』　1987

注２　精華町(『精華町史』史料篇Ⅰ・本文篇)　1989・1996。建物群の時期区分案については、本文献に拠った。

遺跡への案内：本遺跡は、相楽郡精華町大字植田小字新田・畑ノ前に所在する。近鉄京都線新祝園(しんほうその)駅、またはＪＲ学研都市線祝園(ほうその)駅下車、南西約１km。調査地は、現在、公園として整備され人々の憩いの場として利用されている。

長岡京跡調査だより・87

前回の『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成15年７月23日・８月27日・９月24日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内６件、左京域１件、右京域17件であった。京域外５件を併せると、合計27件となる。

調査地一覧表(2003年９月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第423次	7ANBKG-3	向日市寺戸町東野辺31-8	(財)向日市埋文	5/20～7/25
2	宮内第424次	7ANCKM-6	向日市向日町北山21	(財)向日市埋文	6/23～6/26
3	宮内第425次	7ANEYT-9	向日市鶏冠井町山畑39-5	(財)向日市埋文	6/23～6/27
4	宮内第426次	7ANBDN-9	向日市鶏冠井町大極殿66-12	(財)向日市埋文	7/18～7/31
5	宮内第427次	7ANFJK-10	向日市鶏冠井町馬司1	(財)向日市埋文	8/11～8/21
6	宮内第428次	7ANFMK-19	向日市上植野町南開41-１	(財)向日市埋文	8/18～8/27
7	左京第485次	7ANFBD-7	向日市上植野町伴田6-１	(財)向日市埋文	8/1～8/21
8	右京第772次	7ANUNW	京都市西京区大原野石見町地内	(財)京都市埋文研	5/12～8/12
9	右京第773次	7ANKTD-4	長岡京市開田四丁目124-1	(財)長岡京市埋文	6/3～6/4
10	右京第774次	7ANMSL-9	長岡京市東神足一丁目1-39他	(財)長岡京市埋文	6/2～7/11
11	右京第775次	7ANUNW	京都市西京区大原野石見町地内	(財)京都市埋文研	5/12～8/12
12	右京第776次	7ANKST-14	長岡京市開田二丁目210・210-9	(財)長岡京市埋文	6/16～7/16
13	右京第777次	7ANIST-11	長岡京市今里三丁目1	(財)長岡京市埋文	6/23～8/22
14	右京第778次 境野古墳群	7ANTSN-4 4PSTSN-4	大山崎町下植野小字境野町30・32	大山崎町教委	6/9～8/6
15	右京第779次	7ANKTM-8	長岡京市天神一丁目137・138-1他	(財)長岡京市埋文	7/1～7/7
16	右京第780次	7ANBNN-4	向日市寺戸町中野16-16・16-1	(財)向日市埋文	7/7～7/11
17	右京第781次	7ANKSM-11	長岡京市開田二丁目・神足二丁目	(財)京都府埋文	7/9～11/27
18	右京第782次	7ANMSM-3	長岡京市神足一丁目(A-3・5・6)	(財)長岡京市埋文	8/4～10/2
19	右京第783次 恵解山古墳	7ANQMK-4	長岡京市勝竜寺1207、久貝二丁目813・814	(財)長岡京市埋文	8/11～9/30
20	右京第784次	7ANIHR-7	長岡京市今里三丁目2	(財)長岡京市埋文	8/25～9/30
21	右京第785次	7ANMDB-11	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	9/1～10/31

22	右京第786次	7ANSSR-6	大山崎町字円明寺小字里後14-9他	大山崎町教委	8/28～10/10
23	修理式遺跡第７次	3NSBKR-3	向日市寺戸町蔵ノ町5-1他	(財)向日市埋文	5/20～10/6
24	修理式遺跡第８次	3NSBSS-5	向日市寺戸町蔵ノ町5-3、修理式10-4	(財)向日市埋文	8/7～10/6
25	大山崎町遺跡確認第51次	7YYMS'BD-2	大山崎町字大山崎小字琵琶台1-1他	大山崎町教委	8/7～9/22
26	中海道遺跡第62次	3NNANK-62	向日市物集女町中海道57-1他	(財)向日市埋文	9/3～9/19
27	中海道遺跡第63次	3NNANK-63	向日市物集女町北ノ口25番地内	(財)向日市埋文	9/16～9/26

長岡京跡発掘調査抄報

宮域　第423次調査では、規模の大きな柱穴からなる掘立柱建物跡と柵が検出された。いずれも南北方向に軸をもち、３ｍの柱間を保つなど、設計基準に高い企画性がみられる。周辺の調査成果から、朝堂院の北方に位置する官衙区画の中心施設と考えられる。朝堂院西外郭に当たる第425次調査では、北隣で確認されていた、遷都時の地鎮祭にともなう南北方位の柵(柴垣)の延長部は検出されなかったが、代わって２条の南北溝の存在が明らかになり、朝堂院西面築地の西に、区画溝が配されていることがわかった。内裏南方官衙域にあたる第427次調査では、南北方向の溝が検出され、東一坊坊間大路の西側溝と判断された。

左京域　第485次調査では、鴨田遺跡に関連する古墳時代前期の土師器が、湿地状堆積土中から多く出土したとともに、調査区内で鍵手状に折れる長岡京期～平安時代前期の区画溝から、長岡京域では初出となる平城宮6139型式軒丸瓦(西大寺創建瓦)が混入するかたちで出土した。

右京域　現在のＪＲ長岡京駅の周辺は、弥生時代集落として著名な神足遺跡や近世勝龍寺城跡とも重複するが、この地区で３件の調査報告があった(第774・781・782次)。このうち、長岡京期以前の成果としては、方形周溝墓の周溝や土壙墓(第774次)・５世紀後半の小方墳(第782次)などが特記される。長岡京期では、「成」墨書土器を含む土師器埋納土坑(第781次)、鉄滓・炉壁片・鞴羽口・鉄片(粒状・板状)など鍛冶(製鉄)を窺わせる資料が得られた溝や特殊な形態の土坑などの検出(第782次)が注目される。近世勝龍寺城に関連するものとしては、絵図などの文献と照合できる「御足軽町」内の南北に長い掘立柱建物跡(第774次)や、城域西辺を画す外堀・武家屋敷の西境を限り、さらにその中を区画する柵(第782次)などの成果があげられる。

第772・775次調査では、大原野地域に勢力を持った古墳時代後期の首長居館跡が確認された。５世紀末に始まる竪穴式住居による集落域に、６世紀後半段階で、溝で囲繞された方格域に掘立柱建物を「コ」字配置する平面構成をとる。第778次調査では、境野古墳群の調査が実施され、埴輪、葺石を備えた古墳時代前期の前方後円墳である可能性が高まった。

京域外　宮域の北にやや離れて位置する修理式遺跡の調査では、弥生～古墳時代の遺物を含む河道状の湿地堆積や井戸、竪穴式住居跡などが検出された。

(伊賀高弘)

「第20回小さな展覧会」について

当調査研究センターでは、設立以来、普及啓発の一環として「小さな展覧会」を、原則として毎年、８月の後半期に実施している。平成15年度の「小さな展覧会」は、通算20回目の開催となる。会期は、平成15年８月15日～８月31日の15日間で、京都府教育委員会の後援を得て、協賛いただいた向日市文化資料館の施設をお借りして行った。

この展覧会は、発掘調査で出土した遺物を中心に、前年度の成果の中から、とくに重要なものや話題を呼んだものを中心にあつかい、速報性に重点をおいた展示公開の場となっている。また、展示物については、当調査研究センターが直接調査したものだけでなく、京都府内で行われた調査全般を対象とするため、府内の市町村教育委員会や、そのほかの調査機関の調査例を積極的に取り入れることを心掛けて展示内容の充実を図るとともに、府内一円の全体像を把握できることに留意した。

とくに、発掘調査で解明された事実については、現地における調査期間の中で、必要に応じて、その都度、現地説明会などを催してその成果を公開しているが、その後の整理作業や報告書などの作成をすすめる中で新たに判明した事実のうち、遺物を中心に公開の場を設けることを目的としている。

また、展覧会の会期中に、展示遺物に関連する演目を主題にした「第97回埋蔵文化財セミナー」を実施し、展示物を鑑賞するうえで、より深い関心をもってもらうよう努力した。

今回の展覧会では、平成14年度に実施した37件の当調査研究センター調査分の内、10件の遺跡をとりあげ、さらに、京都府内の各関係機関の発掘調査18件と合わせて、合計28件の遺跡に関連した展示を行った。全体的に京都府北部の調査が少なかったこともあり、丹後地域の紹介が例年に比べ少なかった。これに対し、京都府南部地域、とりわけ、乙訓地域や南山城地域の調査成果が目立つかたちとなった。これは、南部地域における高速道路建設などの大規模な開発に伴う発掘調査が一段落したことも理由にあげられる。

以下に、今回の展覧会でとくに注目を集めたものを紹介する。

新堂池古墳群(船井郡園部町：当調査研究センター調査)では、平面形態が「L」字形の横穴式石室などが数基調査され、追葬を示す須恵器類を中心に時期別に展示した。

第１図　熱心な観覧風景

法蔵寺鳴滝乾山窯址(京都市：法蔵寺鳴滝乾山窯址調査団調査)では、江戸時代の絵画琳派の大成者尾形光琳の弟、尾形乾山が元禄12(1699)年から13年間操業していた鳴滝の窯跡(乾山窯)について、ここ数年間の発掘調査で得られた成果を公開した。調査では本窯を遺構として確認するに到ら

第２図　話題になった土辺古墳の家形埴輪

なかったが、その存在を確定できる窯壁片や、さまざまな窯道具などを、「乾山」銘の入った製品などとともに展示した。

京都大学病院構内遺跡（京都市：京都大学埋蔵文化財研究センター調査）では、東山の聖護院における２代目乾山の作陶活動を示す陶磁器片や、幕末期の歌人、大田垣蓮月の手になる「蓮月焼」とその関連資料を集めた。ここでは、とくに「乾山焼」資料について、鳴滝乾山窯跡出土のものと対比できるよう配慮し、両者の作風の違いなどを比較できるように展示方法を工夫した。

山崎院跡（乙訓郡大山崎町：大山崎町教育委員会調査）は、天平３（731）年に建立されたと伝える寺院跡であるが、近年の調査で、彩色壁画片など注目される遺物の出土が相次いでいる。今回の展示では、この寺院関連遺物のうち、釈読作業が進んでいる文字（人名）陰刻瓦をはじめ、これと共伴した塑像や塼仏などの関連遺物を中心にとりあげた。

土辺（つつべ）古墳（乙訓郡大山崎町：当調査研究センター調査）は、名神高速道路のジャンクション建設に伴う下植野南遺跡の調査の中で確認された小規模な古墳（方墳か）であるが、墳丘が早い段階で埋没したこともあって、その外表を飾った埴輪類が良好に残されていた。その中で、周溝内に転落した状態で出土した家形埴輪がほぼ完全な形で復原でき、今回の展示のメインとして出展した。この家形埴輪には、軒先に下がる幕板や軒を支える「方杖（ほうづえ）」などにみられるように、細部の表現が古色を示し、初期の家形埴輪や、さらにその模倣となった当時の家屋の構造を知るうえで、重要な資料の提示となり、内外から注目を集めた。

佐山遺跡（久世郡久御山町：当調査研究センター調査）からは、およそ一町方格の中世前期の居館遺構に関連する遺物のうち、その環濠から出土した黒漆塗の外装がよく残った腰刀を、共伴した柿経や各種木製形代類とともに展示した。腰刀は、鞘や把などの木装部分の細部の構造のみならず、樋が通る刀身の遺存状態も良く、日本刀の成立時における刀剣研究に貴重な資料である。

女谷・荒坂横穴群（八幡市：当調査研究センター調査）では、京都府内でも有数の横穴墓密集地域における調査の成果をもとにして作成した遺構模型を２点公開し、多数の横穴墓が密集して営まれたようすを、鳥瞰視点で理解してもらえるよう、ビジュアルなかたちで示すことができた。

以上のように、今回の「小さな展覧会」では、これまであまり取り上げることのなかった、江戸陶磁や調査地の全容を復原した模型など、例年とは一味違った展示内容となった。また、入場者の方々のご意見ご感想などをアンケート形式で集約した結果、概ね高い評価をいただき、1,000名余りの参加を得て、盛況裏に終えることができた。

なお、今回から当調査研究センターのホームページ上に展覧会の案内を掲示したが、アンケート調査では、これらを見られた方が少なからず来場されたことを付け加えておきたい。

（伊賀高弘）

センターの動向(03.08～10)

1．できごと

8．2　芝山遺跡(城陽市)現地説明会

6　里遺跡第6次(亀岡市)発掘調査終了(5.1～)

13　芝山遺跡、発掘調査終了(4.15～)

15　「第20回小さな展覧会」開催(於：向日市文化資料館)

19　理事協議会(於：当センター)上田正昭理事長、中谷雅治常務理事・事務局長、中尾芳治、井上満郎、都出比呂志、上原真人、奥野義正、杉原和雄各理事出席、「第20回小さな展覧会」視察

27　長岡京連絡協議会(於：当センター)

31　「第20回小さな展覧会」終了(8.15～)

9．3　野条遺跡第8次(八木町)関係者説明会

4　企業内人権啓発推進員研修会京都府企業内人権問題啓発セミナー(於：京都市)安田正人総務課長出席

4～5　埋蔵文化財担当職員等講習会(於：奈良市)石井清司調査第3係長、引原茂治・森島康雄主任調査員出席

9～10　杉原和雄理事、センター南部調査現地視察

10　野条遺跡第8次、発掘調査終了(5.12～)

11　池上遺跡第17次(八木町)発掘調査開始

16　職員研修(於：当センター)講師：高野陽子調査員「土器の広域移動と地域間交流」

17　人権大学講座(於：京都市)杉江昌乃総務係長、今村正寿主任、伊野近富調査第2係長出席

18　杉原和雄理事、センター南部調査現地視察

24　長岡京連絡協議会(於：当センター)

30　職員研修(於：当センター)講師：京都府教育庁学校教育課人権教育室水江尚利室長「人権研修」

10．8　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックＯＡ委員会(於：京都市)久保哲正調査第1課長、辻本和美資料係長出席

16　今井古墳(峰山町)現地説明会
今井古墳、発掘調査終了(7.29～)

20　長岡京跡右京第787次・友岡遺跡(長岡京市)発掘調査開始

22　長岡京連絡協議会(於：当センター)

23～24　全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：東京都)杉江昌乃総務係長、関浩治主査、高野陽子調査員出席

24　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック埋文研修会(於：東大阪市)竹井治雄・黒坪一樹専門調査員、柴暁彦調査員出席
池上遺跡第17次（八木町）関係者

説明会

24～25　日本考古学協会大会(於：彦根市)増田孝彦・岩松保・細川康晴主任調査員出席

29　馬路遺跡(亀岡市)発掘調査開始

30　高梨遺跡(京北町)発掘調査開始

池上遺跡第17次、発掘調査終了(9.11～)

2．普及啓発事業

8．24　第97回埋蔵文化財セミナー（於：向日市民会館）『平成14年度　京都府内発掘調査成果から』：竹原一彦当センター主任調査員「新堂池古墳群の石室」、千葉豊京都大学埋蔵文化財研究センター助手「尾形乾山窯と製品」、石井清司当センター調査第3係長「方杖を持つ家形埴輪」

受贈図書一覧(03.07～09)

(財)北海道埋蔵文化財センター

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第180集　キウス４遺跡(9)、同第181集　野田生１遺跡、同第184集　穂香竪穴群、同第185集　米原４遺跡(2)・宮戸４遺跡(2)、同第186集　浜厚真３遺跡、同第187集　キウス４遺跡(10)、同第188集　オルイカ１遺跡、同第189集　オルイカ２遺跡、同第190集　濁川左岸遺跡、同第191集　本茅部１遺跡、同第192集　ユカンボシC15遺跡、同第193集　対雁２遺跡(4)

青森県埋蔵文化財調査センター

青森県埋蔵文化財調査報告書第343集　野辺地蟹田(10)遺跡Ⅱ・野辺地蟹田(12)遺跡・向田(34)遺跡、同第345集　畑内遺跡Ⅸ、同第346集　笹ノ沢(3)遺跡Ⅲ、同第348集　有戸鳥井平(3)遺跡、同第351集　野尻(3)遺跡Ⅴ、同第353集　上野尻遺跡Ⅳ

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第398集　猪岡館跡第２次発掘調査報告書、同第399集　泉屋遺跡第16・19・21次発掘調査報告書、同第400集　仁昌寺遺跡発掘調査報告書、同第401集　柳沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第402集　米沢遺跡・釜石遺跡発掘調査報告書、同第403集　浅石遺跡発掘調査報告書、同第404集　宮野目方八丁遺跡発掘調査報告書、同第405集　新田遺跡発掘調査報告書、同第406集　久田遺跡発掘調査報告書、同第407集　島岡Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第408集　稲荷遺跡調査報告書、同第409集　矢崎Ⅰ遺跡第２次調査報告書、同第410集　本町Ⅱ遺跡第二次発掘調査報告書、同第411集　明後沢遺跡群発掘調査報告書、同第412集　清田台遺跡発掘調査報告書、同第413集　門松遺跡発掘調査報告書、同第414集　細谷遺跡発掘調査報告書、同第415集　台太郎遺跡第23次発掘調査報告書、同第416集　台太郎遺跡第26次発掘調査報告書、同第417集　台太郎遺跡第35次発掘調査報告書、同第418集　飯岡沢田遺跡第３次発掘調査報告書、同第419集　飯岡沢田遺跡第５次発掘調査報告書、同第420集　野古Ａ遺跡第12次発掘調査報告書、同第421集　野古Ａ遺跡第15次発掘調査報告書、同第422集　台太郎遺跡第44次発掘調査報告書、同第423集　岩手県埋蔵文化財発掘調査略報、紀要ＸＸⅡ

多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市文化財調査報告書第68集　市川橋遺跡、同第70集　市川橋遺跡

(財)山形県埋蔵文化財センター

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第92集　志戸田縄遺跡第２・３次発掘調査報告書、同第93集　三条遺跡第２・３次発掘調査報告書、同第94集　高瀬山遺跡(ＳＡ)第２・３次発掘調査報告書、同第95集　谷柏Ｊ遺跡発掘調査報告書、同第96集　百目鬼遺跡・樋渡遺跡発掘調査報告書、同第97集　中袋遺跡発掘調査報告書、同第98集　中川原Ｃ遺跡・立泉川遺跡発掘調査報告書、同第99集　鶴ヶ岡城跡発掘調査報告書、同第100集　沼向遺跡発掘調査報告書、同第101集　馳上遺跡発掘調査報告書、同第102集　二階堂氏屋敷遺跡発掘調査報告書、同第103集　北小屋屋敷遺跡発掘調査報告書、同第104集　小山遺跡発掘調査報告書、同第105集　菖蒲江１遺跡第２次発掘調査報告書、同第106集　渋江遺跡第４次発掘調査報告書、同第107集　向河原遺跡第４次発掘調査報告書、同第108集　北島遺跡発掘調査報告書、同第109集　山形元屋敷遺跡発掘調査報告書、同第110集　四ツ塚遺跡第４次発掘調査報告書、同第111集　向河原遺跡発掘調査報告書、同第112集　蔵増押切遺跡発掘調査報告書、同第113集　砂子田遺跡第２次・第３次発掘調査報告書、同第114集　かっぱ遺跡発掘調査報告書、同第115集　釜淵Ｃ遺跡発掘調査報告書、同第116集　東畑Ａ遺跡発掘調査報告書、同第117集　山形西高敷地内遺跡第６次発掘調査報告書、年報　平成14年度

福島県文化財センター

よみがえり―Ｆ(ふくしま)Ｉ(いばらき)Ｔ(とちぎ)の昔むかし―

(財)茨城県教育財団

研究ノート12号、年報22

(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター

研究紀要　第11号、年報　第13号、栃木県埋蔵文化財調査報告書第268集　栃木県埋蔵文化財保護行政年報25、同第269集　鳴井上遺跡、同第270集　荻ノ平遺跡、同第271集　野沢遺跡・野沢石塚遺跡、同第272集　高林遺跡、同第273集　西下谷田遺跡、同第274集　東谷・中島地区遺跡群３、同第275集　霞内西遺跡、同第276集　弾正遺跡、同第277集　藤岡神社遺跡Ⅱ

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

荒砥上諏訪遺跡Ⅱ、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団報告第189集　二之宮宮下西遺跡、同第202集　白井遺跡群、同第228集　西長岡南遺跡Ⅱ・Ⅲ、同第254集　和田山天神前遺跡、同第283集　波志江中宿遺跡、同第309集　福島曲戸遺跡・上福島遺跡、同第310集　宿横手三波川遺跡・西横手遺跡群、同第312集　下増田越渡遺跡、同第315集　荒砥諏訪西遺跡Ⅱ・荒砥諏訪遺跡、同第316集　波志江西屋敷遺跡、同第317集　福島久保田遺跡・福島大光坊遺跡、同第320集　稲荷塚道東遺跡、平成14年度　地域教材開発研究・研修報告書

(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研究紀要　第18号、年報23、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第282集　谷ツ遺跡、同第283集　池上／諏訪木、同第284集　東原遺跡、同第285集　如意遺跡Ⅳ、同第286集　北島遺跡、同第287集　木津内貝塚、同第288集　宮西遺跡Ⅰ、同第289集　中尾緑島遺跡Ⅱ

(財)千葉県文化財センター

研究連絡誌　第64号、同第65号、研究紀要23

(財)君津郡市文化財センター

(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第178集　西原遺跡Ⅲ、同第179集　前原遺跡、同第180集　蔵波砦跡Ⅱ、年報No.20、昔むかしのかずさVOL.2

(財)総南文化財センター

年報No.12、(財)総南文化財センター調査報告第44集　長尾陣屋跡・泉遺跡、同第45集　万喜城跡、同第46集　青山松木遺跡・沢辺遺跡発掘調査報告書、同第47集　湯貫田遺跡・花輪遺跡、同第48集　吉井遺跡、同第49集　大野城跡、同第50集　下太田貝塚

(財)香取郡市文化財センター

(財)香取郡市文化財センター調査報告書第24集大塚遺跡群侭田遺跡、同第57集　大塚遺跡群侭田遺跡Ⅱ、同第64集　境原遺跡、同第83集　仲仁良Ⅰ遺跡、同第84集　多古台遺跡群Ⅲ、事業報告XⅡ

(財)東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター

東京都埋蔵文化財センター調査報告第122集東寺方遺跡・落川北・落川南遺跡、同第134集宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡、同第140集　武蔵国府関連遺跡、年報23

(財)新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館

市谷甲良町遺跡、水野原遺跡、行元寺跡

(財)かながわ考古学財団

(財)かながわ考古学財団調査報告151　葛原滝谷遺跡・葛原下滝谷戸遺跡、同153　吉岡遺跡群X

(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター

四枚畑遺跡・川和向原遺跡、西ノ谷貝塚、二ノ丸遺跡

山梨県埋蔵文化財センター

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第202集北河原遺跡、同第205集　大木戸遺跡、同第206集　道々芽木遺跡(第3次)、同第207集　宮の前遺跡、同第209集　酒呑場遺跡(第4次)、同第210集　原町農業高校前(下原)遺跡

(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

長野県の考古学Ⅱ、長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書60　山の神遺跡、同61　丸山遺跡

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

新潟県埋蔵文化財調査報告書第123集　沖ノ羽遺跡Ⅲ、同第124集　関川谷内遺跡Ⅱ、同第125集　下沖北遺跡Ⅰ、同第128集　仲田遺跡、年報　平成14年度

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第19集　北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告(3)、同第20集　能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告、同第21集　勅使塚古墳・中新川郡上市町永代遺跡・東礪波郡福野町安居窯跡群・射水郡小杉町中山中遺跡発掘調査報告、埋蔵文化財調査概要　平成14年度、富山考古学研究　第6号、埋蔵文化財年報(14)

富山県埋蔵文化財センター

年報―平成13年度

(財)岐阜県教育文化財団文化財保護センター

年報3

嬉野町文化財センター

嬉野町埋蔵文化財調査報告16集　瀧之川・森本地区ゴルフ場建設に伴う発掘調査報告書、平成13年度嬉野町文化財調査概要、釜生田辻垣内瓦窯鴟尾と嬉野の古代寺院

(財)滋賀県文化財保護協会

レトロ・レトロの展覧会2003

(財)栗東市文化体育振興事業団文化財

1986年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集、栗東市埋蔵文化財調査報告2001年度　年報、霊仙寺遺跡発掘調査報告書

(財)大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書第85集粟生間谷遺跡、同第91集　杉遺跡、同第92集

大尾遺跡、同第97集　尺度遺跡Ⅱ、同第98集　讃良郡条里遺跡(その２)、同第99集　太秦古墳群、池島・福万寺遺跡発掘調査概要31

(財)大阪市文化財協会

瓜破遺跡発掘調査報告Ⅲ、広島藩大坂蔵屋敷Ⅰ、大坂城跡Ⅶ、大阪市埋蔵文化財発掘調査報告―2001・2002年度

(財)枚方市文化財研究調査会

枚方市文化財調査報告第42集　禁野本町遺跡Ⅱ、枚方市文化財年報23、同24

(財)八尾市文化財調査研究会

平成14年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告、20年のあゆみ、(財)八尾市文化財調査研究会報告74、同75、同76

(財)元興寺文化財研究所

研究報告2002、春日大社の版木

桜井市立埋蔵文化財センター

桜井市内埋蔵文化財2001年度発掘調査報告書１、同５、桜井市内埋蔵文化財2002年度発掘調査報告書１

鳥取県埋蔵文化財センター

青谷上寺地遺跡６

島根県埋蔵文化財調査センター

増補改訂　島根県遺跡地図Ⅰ、西川津遺跡Ⅸ、西Ⅰ遺跡・祇園原Ⅰ遺跡・石橋Ⅰ遺跡・高瀬城北遺跡、尾白Ⅰ遺跡・尾白Ⅱ遺跡・家ノ脇Ⅱ遺跡３区・川平Ⅰ遺跡、家の後Ⅰ遺跡・垣ノ内遺跡、殿淵山遺跡・獅子谷遺跡(2)、神原Ⅱ遺跡(3)、戸井谷遺跡、板屋Ⅲ遺跡(2)、貝谷遺跡(2)・丸山金屋子遺跡、権現山城跡・権現山石切場跡・白石谷遺跡・三田谷Ⅰ遺跡、古志本郷遺跡Ⅴ、古志本郷遺跡Ⅵ、長廻遺跡(Vol.２)・権現山古墳、斐伊川放水路発掘物語　総集編、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報11、風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書14　史跡出雲国府跡１、島根県古代文化センター調査研究報告書13　弥生時代の磨製石器

岡山市埋蔵文化財センター

年報２、中尾平山遺跡、妹尾住田遺跡

(財)吉田町地域振興事業団

(財)吉田町地域振興事業団報告書第７集　郡山大通院谷遺跡、同第８集　郡山大通院谷遺跡、同第９集　郡山大通院谷遺跡、同第10集　耳塚古墓

(財)香川県埋蔵文化財調査センター

天王谷遺跡、寺田・産宮通遺跡・南天枝遺跡、北原２号墳・北原遺跡、高松城跡(西の丸地区)Ⅱ、同Ⅲ、空港跡地遺跡Ⅵ(Ｇ地区)、山南遺跡、国立善通寺病院改修事業に伴う旧練兵場遺跡発掘調査概報１

(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

松山市文化財調査報告書第17集　福音寺・星ノ岡・北久米遺跡、同第19集　高月山古墳群、同第43集　斎院の遺跡　北斎院地内・斎院烏山、同第88集　船ヶ谷遺跡、同第91集　福音寺小学校構内遺跡Ⅱ、同第95集　船ヶ谷遺跡４次調査Ⅱ・福音寺小学校構内遺跡Ⅲ、松山市埋蔵文化財調査年報14

小郡市埋蔵文化財調査センター

小郡市文化財調査報告書第106集　苅又地区遺跡群Ⅴ、同第171集　福童山の上遺跡５、同第172集　横隈上内畑遺跡５、同第173集　三沢ハサコの宮遺跡Ⅳ、同第174集　力武内畑遺跡５・６、同第177集　西島遺跡６・７、同第178集　三沢宮ノ前遺跡２、同第182集　三沢北中尾遺跡３地点、同第183集　大保龍頭遺跡３・４・５、同第185集　三沢宮ノ原遺跡

宮崎県埋蔵文化財センター

年報　第２～７号

大船渡市教育委員会

碁石遺跡平成８・９年度緊急発掘調査報告書、同平成10年度緊急発掘調査報告書、長谷堂貝塚群平成８・10・11年度緊急発掘調査報告書、丸森Ⅲ遺跡平成11年度緊急発掘調査報告書、中井貝塚平成12年度緊急発掘調査報告書、大洞貝塚平成12・13年度内容確認調査報告書、宮野貝塚緊急発掘調査報告書、殿位Ⅱ遺跡平成14年度緊急発掘調査報告書

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第259集　仙台城跡１、同第264集　仙台城跡１

名取市教育委員会

名取市文化財調査報告書第40集　元中田遺跡、同第43集　原遺跡、同第44集　原遺跡、同第46集　原遺跡、同第47集　野田山遺跡、同第49集　原遺跡発掘調査報告書

盛岡市教育委員会

志波城跡―第Ⅰ期保存整備事業報告書

古川市教育委員会

宮城県古川市文化財調査報告書第31集　堤根遺跡・中沢遺跡、同第32集　灰塚遺跡・杉ノ下遺跡、同第33集　名生館官衙遺跡ＸＸ、同第34集　筆塚Ｂ遺跡

鶴岡市教育委員会

山形県鶴岡市埋蔵文化財調査報告書第20集　市内遺跡分布調査報告書(6)、同第21集　山田遺跡発掘調査報告書、同第22集　高間々遺跡発掘

調査報告書

会津坂下町教育委員会

会津坂下町文化財調査報告書第54集　会津坂下町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ、同第55集　県営かんがい排水事業発掘調査報告書

郡山市教育委員会

清水台遺跡第23次調査報告・咲田遺跡第４次調査報告、仲頃遺跡発掘調査報告、柳橋遺跡発掘調査報告、大安場古墳群第４次発掘調査報告、荒井猫田遺跡(Ⅱ区)第15次発掘調査報告、石畑遺跡(第１・２次)・馬場中路遺跡(第２次)・馬場小路遺跡(第２次)、郡山市埋蔵文化財分布調査報告10、郡山を掘る

石岡市教育委員会

常陸国衙跡Ⅰ

高崎市教育委員会

高崎市遺跡調査会報告書第61集　上豊岡引間Ⅳ遺跡、同第82集　剣崎六万坊遺跡、同第83集　並榎町Ⅰ遺跡、同第84集　浜尻旭貝戸遺跡、高崎市文化財調査報告書第177集　高崎情報団地Ⅱ遺跡、同第178集　高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書16、同第179集　剣崎長瀞西遺跡、同第180集　真町Ⅲ・旭町Ⅳ・弓町Ⅰ遺跡、同第181集　下之城村前Ⅳ遺跡、同第182集　萩原八幡西・上五丁田Ⅲ・下五丁田Ⅱ遺跡、同第183集　下中居条里遺跡Ⅲ、同第184集　下之城村前Ⅴ遺跡、同第185集　高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書16

鳩山町教育委員会

鳩山町埋蔵文化財調査報告第25集　町内遺跡Ⅴ、同第26集　鳩山町内遺跡分布調査報告書、同第27集　今宿東遺跡群Ⅰ

白井市教育委員会

根シシアナ遺跡(第２次)

東金市教育委員会

平成14年度東金市内遺跡発掘調査報告書

茅ヶ崎市教育委員会

茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告17　市内遺跡試掘・確認調査報告Ⅰ

茅ヶ崎市文化振興財団調査報告第４集　西久保・上ノ町遺跡　下町屋・石原Ｂ遺跡、同第５集　西久保・上ノ町遺跡　下町屋・石原Ｂ遺跡

鎌倉市教育委員会

鎌倉市朝比奈砦発掘調査報告書、鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19　平成14年度発掘調査報告、鎌倉市の埋蔵文化財６、五合桝遺跡(仏法寺)発掘調査報告書　平成14年度

長坂町教育委員会

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第26集　窪田遺跡、同第27集　上日野Ｂ遺跡・上日野Ｃ遺跡

岡谷市教育委員会

上向Ａ・海戸遺跡発掘調査報告書(概報)

砺波市教育委員会

増山城跡発掘調査報告、増山城跡Ⅵ

小矢部市教育委員会

小矢部市埋蔵文化財調査報告書第51冊　桜町遺跡発掘調査報告書

福岡町教育委員会

福岡町埋蔵文化財調査報告書12　上野Ａ遺跡発掘調査報告Ⅱ、同13　富山県福岡町埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ

大垣市教育委員会

大垣市埋蔵文化財調査報告書第12集　史跡　昼飯大塚古墳

多治見市教育委員会

多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第68号　野中遺跡発掘調査報告書(第３次)、同第69号　喜多町東遺跡発掘調査報告書(第３次)、同第70号　多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

各務原市教育委員会

平成11・12年度各務原市市内遺跡発掘調査報告書

稲沢市教育委員会

稲沢市内遺跡発掘調査報告書Ⅶ、下津公民館用地埋蔵文化財発掘調査報告書

長久手町教育委員会

長久手町史　本文編

四日市市教育委員会

四日市市文化財保護年報14

長浜市教育委員会

「豊臣家」シンポジウム資料

八日市市教育委員会

八日市市文化財調査報告22　建部堺遺跡発掘調査報告書

新旭町教育委員会

新旭町文化財調査報告書第２集　清水山城郭群確認調査報告書、同第３集　熊野本古墳群Ⅰ、同第４集　正伝寺南遺跡発掘調査報告書

藤井寺市教育委員会

藤井寺市文化財報告第23集　石川流域遺跡群発掘調査報告ⅩⅧ

柏原市教育委員会

柏原市文化財概報2002-Ⅰ　柏原市埋蔵文化財緊急発掘調査概報平成14(2002)年度、同2002-Ⅲ　大県遺跡群分析調査報告書2002年度、玉手山古墳群の研究Ⅲ

東大阪市教育委員会

段上遺跡第13次発掘調査報告書、善根寺遺跡第

1次発掘調査概要報告、東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—平成14年度、東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報—平成14年度

八尾市教育委員会

八尾市文化財調査報告48　八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書、八尾市立埋蔵文化財調査センター報告4

加美町教育委員会

加美町文化財報告7　豊部井杉遺跡Ⅱ

東浦町教育委員会

東浦町埋蔵文化財調査報告書3　大坂遺跡・千本遺跡・行免形遺跡

八鹿町教育委員会

兵庫県八鹿町文化財調査報告書第17集　史跡八木城跡保存管理計画策定報告書、甘棠亭保存修理工事報告書

佐用郡教育委員会

佐用郡文化財報告書第6集　平成13年度佐用郡埋蔵文化財調査年報、同第7集　平成7年度佐用郡埋蔵文化財調査年報

田原本町教育委員会

田原本町埋蔵文化財調査年報12、たわらもと2003

王寺町教育委員会

王寺町文化財調査報告書第2集　達磨寺3号墳、同第3集　久度南遺跡

明日香村教育委員会

明日香村遺跡調査概報平成13年度、明日香村文化財調査研究紀要第2号、同第3号

淀江町教育委員会

淀江町埋蔵文化財調査報告書第53集　福岡柳谷遺跡、同第54集　百塚遺跡群Ⅸ

弥栄村教育委員会

長安本郷神代屋遺跡

岡山県教育庁文化財課

岡山県埋蔵文化財報告33

井原市教育委員会

井原市埋蔵文化財発掘調査報告1　東大谷1号墳

総社市教育委員会

総社市埋蔵文化財年報12

矢掛町教育委員会

矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告2　清水谷遺跡

下関市教育委員会

下関市埋蔵文化財調査報告書49　宮の原遺跡、同55　永福遺跡、同62　長門国府跡、同75　長門鋳銭所跡、同76　塚の原遺跡、同77　矢風呂遺跡、同78　長門国府跡

豊浦町教育委員会

豊浦町の文化財第20集　川棚条里跡3

高松市教育委員会

高松市埋蔵文化財調査報告第66集　日暮・松林遺跡

丸亀市教育委員会

平成13年度丸亀市内遺跡発掘調査概要報告書、同平成14年度、中の池遺跡8次、中の池遺跡Ⅱ

松山市教育委員会

松山市文化財調査報告書第92集　葉佐池古墳、同第93集　久米高畑遺跡25次調査、同第94集　樽味四反地遺跡6次調査

福岡県教育委員会

大的遺跡Ⅰ・日詰遺跡Ⅰ、菩提遺跡、忠隈宮坂遺跡・鶴三緒七浦遺跡、福岡県文化財調査報告書第172集　殖木平田遺跡、同第173集　和泉トノエ遺跡、同第174集　尻高後椀遺跡、同第175集　南原西門田遺跡、同第176集　越路長様遺跡・越路鍛冶屋原遺跡・築城古迫遺跡Ⅱ、同第177集　植松遺跡、同第178集　西新町遺跡Ⅴ、同第179集　市丸城居屋敷遺跡・六郎堂ノ前遺跡・六郎神田遺跡・六郎桜木遺跡、同第180集　湯無田遺跡、同第181集　内ヶ磯窯跡3、同第182集　彼坪遺跡Ⅱ、同第183集　木井馬場井口遺跡・味噌ヶ谷越古道跡、福岡県埋蔵文化財発掘調査年報—平成13年度、九州歴史資料館研究論集28、大宰府史跡発掘調査報告書Ⅱ、大宰府へ、こころが動き、ものが動く

北九州市教育委員会

北九州市文化財調査報告書第97集　木屋瀬宿東溝口跡、同第98集　大門遺跡、同第99集　室町遺跡第4地点、上葛原遺跡第1地点、同第2地点、北九州市埋蔵文化財分布地図(八幡西区)

大刀洗町教育委員会

大刀洗町文化財調査報告書第24集　高橋城跡1、同第25集　高橋城跡2、同第26集　山隈中西又原遺跡

若宮町教育委員会

若宮町文化財調査報告書第17集　原田遺跡群Ⅰ、同第18集　中遺跡群Ⅴ、同第19集　小原古墳群Ⅱ

佐賀市教育委員会

佐賀市文化財調査報告書第140集　牟田口遺跡、同第141集　石土井遺跡・上九郎遺跡・薬師丸五本柳遺跡・園田遺跡、同第142集　佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書

鳥栖市教育委員会

鳥栖市文化財調査報告書第51集　本行遺跡、同第52集　養父遺跡・四の坪遺跡・本村遺跡・原古賀遺跡、同第54集　京町遺跡、同第55集　今

泉町遺跡、同第56集　西田遺跡、同第58集　蔵上遺跡Ⅰ、同第59集　内精遺跡、同第60集　蔵上遺跡Ⅱ、同第61集　蔵上遺跡Ⅲ、同第62集　安永田遺跡、同第63集　長ノ原遺跡・神山古墳、同第64集　加藤田遺跡、同第65集　長ノ原遺跡、同第66集　永田古墳群、同第67集　安永田遺跡、同第68集　藤木遺跡・今泉遺跡、同第69集　所熊山古墳群、同第70集　フケ山遺跡・神山遺跡・内畑遺跡、江戸時代の鳥栖、同Ⅱ、鳥栖の中世、同Ⅱ、同Ⅲ、同Ⅳ、鳥栖の歴史と石造文化

鎮西町教育委員会

鎮西町文化財調査報告書第21集　平野町遺跡（第Ⅱ区）

神埼町教育委員会

神埼町文化財調査報告書第66集　西田遺跡Ⅱ区、同第67集　船塚遺跡、同第68集　荒堅目遺跡Ⅱ区、同第69集　唐香原遺跡Ⅱ区、同第70集　馬郡遺跡Ⅲ区、同第71集　利田柳遺跡８・９・10区、同第72集　城原一本松遺跡Ⅱ区、同第73集　馬郡遺跡Ⅰ・Ⅱ区、同第74集　猿嶽古墳群、同第75集　花浦古墳群、同第76集　八子三本黒木遺跡Ⅱ区、同第77集　八子三本黒木遺跡Ⅰ区、同第78集　尾崎土生遺跡16区、同第79集　尾崎土生遺跡、同第80集　唐香原遺跡Ⅲ区、同第81集　小渕遺跡13区

南串山町教育委員会

南串山町文化財調査報告書第５集　妙見床

鷹島町教育委員会

鷹島町文化財調査報告書第７集　鷹島海底遺跡Ⅷ、同第８集　鷹島海底遺跡Ⅸ

五木村教育委員会

五木村文化財調査報告第５集　逆瀬川遺跡

佐伯市教育委員会

佐伯城下町遺跡

高岡町教育委員会

高岡町埋蔵文化財調査報告書第25集　永迫第２遺跡、同第26集　押田遺跡、同第27集　梅木田遺跡、同第28集　高岡町内遺跡Ⅷ、同第29集　小田元第２遺跡

高城町教育委員会

高城町文化財調査報告書第11集　町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ、同第12集　様ヶ野遺跡、同第13集　町内遺跡発掘調査報告書Ⅲ

東北歴史博物館

研究紀要４、平成14年度　年報

秋田県立博物館

研究報告　第28号、年報　平成15年

栃木県立博物館

トンボ

福島県立博物館

発掘ふくしま３

群馬県立歴史博物館

紀要　第24号

国立歴史民俗博物館

研究報告　第98集、同第100集、同第104集、同第105集、平成15年度版　要覧

千葉県立中央博物館

研究報告－人文科学－第８巻第１号

千葉県立房総風土記の丘

年報24、研究紀要　第７号、年報８

流山市立博物館

年報　No.24

出光美術館

館報　第123号

大田区立郷土博物館

紀要　第13号

平塚市博物館

年報　第26号、自然と文化　第26号

長野県立歴史館

ＳＯＳ　ふるさとの文化財をすくえ

松本市立考古博物館

松本市文化財調査報告No.155　大久保原遺跡Ⅰ、同No.156　新村遺跡、同No.157　出川南遺跡Ⅷ、同No.158　出川南遺跡ＸⅡ、同No.159　惣社遺跡Ⅰ、同No.160　松本城下町跡、同No.161　出川南遺跡ＸⅠ、同No.165　県町遺跡ＸⅡ、同No.166平田本郷遺跡Ⅳ・Ⅴ

上田市立博物館

写真に見る戦前・戦中の農村

塩尻市立平出博物館

松本平の土偶、平出博物館ノート16、同17、紀要　第19集、同第20集

石川県立歴史博物館

風俗画伯　巌如春、能登　仏像紀行

名古屋市博物館

年報No.26

名古屋市見晴台考古資料館

見晴台遺跡第39・40・41次発掘調査の記録、年報20、見晴台教室'02、発掘された江戸時代のなごや、研究紀要　第５号、名古屋市文化財調査報告58　埋蔵文化財調査報告書44、同59　埋蔵文化財調査報告書45、同60　埋蔵文化財調査報告書46、同61　埋蔵文化財調査報告書47、同62　埋蔵文化財調査報告書48、天白元屋敷遺跡第４・５次発掘調査報告書、朝日遺跡第11次発掘調査報告書、朝日遺跡第12次発掘調査報告書、

古沢町遺跡第３次発掘調査概要報告書、名古屋城跡三の丸遺跡、戸田Ｂ遺跡発掘調査報告書

斎宮歴史博物館

平成13年度　年報

滋賀県立安土城考古博物館

小さな遺物見つけた！！

滋賀県立琵琶湖博物館

外来生物

八尾市立歴史民俗資料館

卑弥呼の時代と八尾、河内の災害史、館報　平成13年度、研究紀要　第14号、八尾　愛宕塚と山麓の古墳、子ども古代探検！八尾　高安古墳群

大東市立歴史民俗資料館

大東市埋蔵文化財調査報告第18集　寺川遺跡発掘調査報告書

柏原市立歴史資料館

玉手山古墳群を探る、高井田横穴群の線刻壁画—資料集、館報14、同15

太子町立竹内街道歴史資料館

館報(第９号)、科長の里のむかしばなし

神戸市立博物館

館蔵品目録　美術の部19、同考古・歴史の部19、年報　No.18、研究紀要　第19号

西宮市立郷土資料館

研究報告　第６集、昔西宮名所独案内

姫路市立城郭研究室

特別史跡　姫路城跡Ⅱ

明石市立文化博物館

藤江別所遺跡

奈良国立博物館

弥勒如来にささげる

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所飛鳥資料館

東アジア金属工芸史の研究１　神門神社蔵鏡図録、同２　含水居蔵鏡図録、同３　山宮神社蔵鏡図録、同４　都萬神社蔵鏡図録

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

大和を掘る21

広島県歴史民俗資料館等連絡協議会

21世紀のミュージアム活動に向けて

山口県立山口博物館

研究報告　第29号、館報25

古賀市立歴史資料館

古賀市文化財調査報告書第23集　川原西地区遺跡群第１地点の調査、同第24集　川原西地区遺跡群第２地点の調査報告、同第25集　川原西地区遺跡群第１地点Ⅱ、同第26集　六ノ坪・百田遺跡１、同第30集　極田・杉ノ木遺跡、同第31集　川原西地区遺跡群Ⅲ、同第32集　極田・杉ノ木遺跡、同第33集　鹿部田渕遺跡第２次・６次・７次、馬渡・東ヶ浦遺跡

熊本市立熊本博物館

館報No.15

東北芸術工科大学

東北芸術工科大学考古学研究報告第１冊　置賜地域の終末期古墳１、同第２冊　高安窯跡群

立正大学文学部考古学研究室

考古学論究　第９号

早稲田大学考古学会

古代　第111号

天理大学文学部歴史文化学科考古学・民俗学専攻

古事　第７冊、考古学と民俗学とのふれあい

広島大学埋蔵文化財調査室

広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

福岡大学人文学部考古学研究室

福岡大学考古学研究室研究調査報告第２冊　佐賀県・東十郎古墳群の研究、厳原町文化財調査報告書第７集　国史跡矢立山古墳群

熊本大学埋蔵文化財調査室

年報９、熊本大学埋蔵文化財調査報告書第１集　熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅰ

(財)アイヌ文化振興・研究推進機構

アイヌからのメッセージ

(株)ジャパン通信情報センター

文化財発掘出土情報　第255号、同第261号

(株)角川学芸出版

角川選書355　前方後円墳国家

(株)小学館

考古資料大観　第１巻、同第８巻

(株)四門

子安台遺跡

テイケイトレード(株)

市谷甲良町遺跡Ⅱ

国立国会図書館

日本全国書誌　通号2434、2435号

文京区遺跡調査会

文京区埋蔵文化財調査報告書第28集　白山御殿跡ほか

国分寺市遺跡調査会

恋ヶ窪東遺跡発掘調査概報Ⅲ

全国天領ゼミナール事務局

第18回全国天領ゼミナール記録集

(財)古代學協會

古代文化　第55巻第７～９号

大阪・郵政考古学会

郵政考古紀要　第32号

高山歴史学研究所

高山歴史学研究所文化財調査報告書第10冊　月若遺跡

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

奈良文化財研究所学報第67冊　平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告書、同第68冊　吉備池廃寺発掘調査報告、奈良文化財研究所史料第59冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅲ、官営工房研究会会報８、飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(16)、平城宮発掘調査出土木簡概報(37)、大極殿関係史料(稿)(1)儀式書編、奈良文化財研究所紀要2003、奈良文化財研究所概要2003

奈良県立橿原考古学研究所

考古學論攷　第26冊、奈良県文化財調査報告書第54集　新在家遺跡、同第92集　上５号墳、同第94集　三井岡原遺跡、同第95集　北野ウチカタビロ遺跡、同第96集　久米石橋遺跡(藤原京右京十二条五坊)、同第97集　三吉２号墳・ダダオシ古墳、同第100集　保津・宮古遺跡、奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第57冊　只塚廃寺・首子遺跡、同第60冊　能峠遺跡群Ⅲ、同第61冊　後出古墳群、奈良県立橿原考古学研究所調査報告第80冊　伴堂東遺跡、同第81冊　三ツ塚古墳群、同第82冊　中山大塚古墳、同第83冊　本郷大田下遺跡、同第84冊　宮の平遺跡Ⅰ、同第85冊　中町西遺跡

大和高田市郷土資料室

大和高田市文化財調査報告第６集　インキ古墳、同第７集　大和高田市内遺跡発掘調査報告、かん山古墳第１次発掘調査概要報告書

朝鮮学会

朝鮮学報　第187輯

興福寺

興福寺第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅳ

島根県古代文化センター

島根県古代文化センター調査研究報告書16　宮山古墳群の調査

(財)嶺南文化財研究院

嶺南文化財研究院學術調査報告第21冊　大邱時至地區生活遺蹟Ⅱ、同第23冊　大邱旭水洞391-2番地生活遺蹟、同第24冊　浦項草谷里遺蹟、同第25冊　大邱時至地區生活遺蹟Ⅲ、同第26冊　大邱内患洞墳墓群、同第28冊　大邱時至地區生活遺蹟Ⅳ、同第30冊　慶州龍江洞苑池遺蹟、同第32冊　慶州舎羅里遺蹟Ⅱ、同第33冊　大邱時至地區古墳群Ⅰ、同第34冊　慶山林堂洞遺蹟Ⅱ、同第35冊　慶山林堂洞遺蹟Ⅲ、同第36冊　慶山林堂洞遺蹟Ⅳ、同第37冊　漆谷福星里支石墓群、同第38冊　金泉帽岩洞遺蹟Ⅰ、同第39冊　永川清亭里遺蹟、同第40冊　大邱西邊洞古墳群Ⅰ、同第41冊　蔚山川上里聚楽遺蹟、同第42冊　慶州九於里古墳群Ⅰ、同第43冊　大邱東川洞聚楽遺蹟、同第44冊　大邱佳川洞古墳群Ⅰ、同第45冊　高靈桃津里古墳群、同第46冊　大邱東内洞遺蹟、同第47冊　大邱西邊聚楽遺蹟Ⅰ、同第48冊　大邱新梅洞164番地遺蹟、同第49冊　龜尾黄桑洞382番地遺蹟、同第50冊　清道元井里古墳群、同第51冊　慶州西部洞4-1番地遺蹟、同第52冊　大邱蓮湖洞墳墓群、同第54冊　蔚山倉坪洞遺蹟、同第55冊　達城汶陽里古墳群Ⅰ、同第56冊　大邱鳩岩洞６番地遺蹟、同第57冊　金泉帽岩洞遺蹟Ⅱ、同第58冊　大邱旭水洞128番地生活遺蹟、同第59冊　慶州皇吾洞118-6番地遺蹟、同第60冊　大邱旭水洞388番地遺蹟、同第61冊　大邱東湖洞遺蹟、同第62冊　金泉帽岩洞１號墳、嶺南文化財研究院五年史

畿甸文化財研究院

學術調査報告第15冊　利川2001世界陶磁器EXPO敷地試掘調査報告書、同第21冊　南陽州好坪・坪内宅地開發地區内文化遺蹟、同第25冊　水原九雲洞中世住宅遺蹟、同第33冊　河南校山洞建物址發掘調査中間報告書Ⅲ、畿甸考古　創刊號、同第２號、京畿道博物館遺蹟調査報告第６冊・畿甸文化財研究院學術報告書第20冊　檜巖寺Ⅰ、學術調査報告第39冊　慶州三里舊石器遺蹟

(財)京都市埋蔵文化財研究所

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-3　平安京右京三条一坊三町(右京職)跡、同2001-6　平安京右京三条二坊十五町・三坊二町跡、同2002-7　平安京左京三条三坊十町(押小路殿・二条殿)跡、同2002-8　平安京左京一条四坊九町跡、同2002-13　史跡旧二条離宮(二条城)、同2002-18　鳥羽離宮跡

(財)向日市埋蔵文化財センター

都城14、向日市埋蔵文化財調査報告書第56集　長岡京跡左京二条二坊十町、同第58集　中海道遺跡、同第60集　久々相遺跡・中海道遺跡

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市埋蔵文化財調査報告書第32集　長岡京跡左京第479次発掘調査報告、同第33集　長岡京跡右京第766次発掘調査報告、同第36集　長岡京跡右京第776次発掘調査報告

京都市文化市民局

京都市の文化財(第21集)

大宮町教育委員会
大宮町文化財調査報告第20集　左坂古墳(墳墓)群G支群、古代の丹後
宮津市教育委員会
宮津市歴史資料館常設展案内
山城町教育委員会
京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第30集　綺田渋川遺跡試掘調査報告、同第31集　車谷古墳群
園部文化博物館
園部町文化財調査報告第16集　下金沢古墳
亀岡市文化資料館
火伏の神愛宕さん、発掘された日本列島2003地域展
城陽市歴史民俗資料館
模型の世界
立命館大学文学部
立命館大学文学部学芸員課程研究報告第10冊　五塚原古墳第1・2次発掘調査概報、立命館大学考古学論集Ⅲ　家根祥多さん追悼論集
京都橘女子大学
文化財学概論
(株)文化財サービス
考古学今昔物語

伊賀高弘
立命館文學　第566号、同第575号、同第578号
中尾芳治
古代の難波と難波宮
春成秀爾
日本および東アジアの化石鹿、シンポジウム：更新世発表要旨、先史時代の生活と文化、考古学資料集1　旧石器時代の打製骨器、同2　シベリアの細石刃石器群、同3　黒潮圏の磨製石斧、同4　環東中国海沿岸地域の先史文化、同5　中国の旧石器、同6　北東アジアにおける石刃鏃文化、同7　環東中国海沿岸地域の先史文化第2編、同8　シベリアの細石刃石器群(2)、同9　縄文・弥生移行期における東日本系土器、同10　百色旧石器、同11　環東中国海沿岸地域の先史文化、同12　縄文・弥生移行期の石製呪術具1、同14　大分県聖嶽洞窟の発掘調査、同15　福岡県岐志元村遺跡、同16　佐賀県大友遺跡、同17　縄文・弥生移行期の石製呪術具2、同18　縄文・弥生移行期の石製呪術具3、同19　弥生文化成立期の西日本・韓国の土器、同21　弥生時台の武器形青銅器、同24　環東中国海沿岸地域の先史文化、同25　東アジアの囲壁・環濠集落、同27　沖縄県大泊浜貝塚、同28　環東中国海沿岸地域の先史文化第5編、同29　沖縄県茅打バンタ遺跡、同30　佐賀県大友遺跡Ⅱ
堀田啓一
改訂九度山町史　史料編抜刷　考古、岩橋千塚ところ・どころ
水野正好
第3回平泉町世界遺産講演会報告書
森岡秀人
芦屋市文化財調査報告第44集　徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ
森島康雄
出土銭貨　第17～19号
山岸良二
東邦考古　第27号

編集後記

冬の訪れとともに、年末の慌ただしい季節になりました。

本号では、方形周溝墓と埴輪という、「墓」に関する２編の論考を掲載することができました。言うまでもなく、墓・墳墓は、文化の伝播や社会構造を研究するうえに、最も有効で重要な研究資料であります。ご味読いただくとともに、二人の研究がより進展することを期待してください。

さて、当調査研究センターでは、毎年夏に「小さな展覧会」の名で、前年度に京都府内で行われた顕著な発掘調査を取りあげ、出土遺物やパネルの展示を行っています。今年度も盛況のうちに終了することができました。今後も、よりわかりやすい展覧会をめざしますので、今回、ご覧になられなかった方は、ぜひ来年の展覧会にお越し下さい。お待ちしております。

（編集担当＝辻本和美）

京都府埋蔵文化財情報 第90号

平成15年12月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189

印刷　三星商事印刷株式会社

〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 (代)